

江戸時代後期に出版された「京都観光案内」本

江戸時代における京都観光案内のルート 近世の旅人の京都みちしるべ

教育旅行での京都班別行動での手引書

目次：

- 1 京都 近世での出版について
- 2 江戸時代の京都案内本一覧について
- 3 江戸時代の旅について
- 4 近世、明治の京都観光
 - 4-1 近世京都における旅人の観光行動
 - 4-2 明治前期の名所案内記にみる 京名所についての考察

以上

北野界わい創生会

代表 鳥井光広

【目次】

■ 知る

- 」 京都の出版のはじまり
- 」 古活字版
- 」 出版書林の出現
- 」 書林仲間
- 」 草紙屋
- 」 浮世草子と八文字屋本
- 」 案内書の刊行
- 」 京絵図の出版

■ 歩く・見る

- 」 円光寺 左京区一乗寺小谷町
- 」 永田調兵衛 下京区花屋町通西洞院(永田文昌堂)
- 」 佐々木惣四郎 中京区寺町通姉小路上る西側(竹苞楼)
- 」 村上勘兵衛 中京区東洞院通三条上る(平楽寺書店)
- 」 八文字屋自笑翁邸跡 中京区麩屋町通六角下る西側

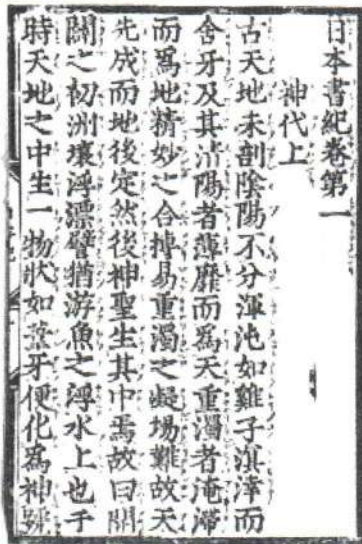
■ 知る

」 京都の出版のはじまり

京都では平安時代より仏教の經典類が印刷されています。東山の知恩院を中心に浄土教関係の出版(浄土教版)が行われ、京都五山の禅僧によってはじめられた五山版では禅籍のみならず詩文集や漢籍も刊行されました。

戦国末期には、キリスト教宣教師が教書などを刊行するために用いたキリシタン版が出版され、さらに文禄2(1593)年に後陽成天皇勅版の『古文孝経』(こぶんこうきょう)が刊行されるに及んで、日本出版史は一つの画期を迎えます。

当時の印刷方法は、版木に直接文字や図形を彫刻して印刷した整版と、一字ずつ活字を組んで版を作る活字版がありました。活字版には銅製の活字を使った銅活字版と、慶長勅版などで見られるような木製の活字を使用した木活字版があります。



慶長勅版『日本書紀神代卷』(陽明文庫蔵)

■ 古活字版(こかつじばん)

安土桃山時代末期から江戸初期にかけて出版された活字印本は古活字版と呼ばれており、次のようなものがあります。

キリシタン版 天正19(1591)年から慶長16(1611)年にかけて刊行され、『平家物語』など現在29種が知られています。京都で出版されたのは、慶長15年4月に原田アントニオが印刷した仮名まじり文の宗教書『こんてむつす・むん地』の一種のみです。

慶長勅版(けいちようちよくはん) 慶長2(1597)年から同8(1603)年にかけて、後陽成天皇の命により、大型の木製活字を用いた勅版が印刷され、『錦織段』(きんしゅうだん)『日本書紀神代卷』(にほんしよきかみよのまき)『論語』『孟子』などを出版しました。

伏見版(ふしみばん) 円光寺版(えんこうじばん)とも呼ばれ、閑室元佑(かんしつげんきつ, 1548~1612)が、伏見の円光寺(現左京区一乗寺小谷町)で、慶長4(1599)年に徳川家康が寄附した木活字10万字を使用し、『孔子家語』(こうしけご)『三略』(さんりゃく)『六韜』(りくとう)『貞観政要』(じょうがんせいよう)『周易』(しゅうえき)などの書物を印刷しました。

嵯峨本(さがぼん) 本阿弥光悦(ほんあみこうえつ, 1558~1637)が角倉素庵(すみのくらそあん, 1571~1632)の協力を得て平仮名交りの国書を木活字で出版しました。角倉本・光悦本とも呼ばれたこの書籍は、装丁の美しさが特徴で、表紙・本紙には雲母紙を使っています。慶長13(1608)年刊の『伊勢物語』(10種)をはじめとし、『方丈記』『百人一首』『徒然草』『源氏物語』などを出版しました。

■ 出版書林の出現

慶長年間(1596~1615)には、本を出版し店頭で販売する本屋(書林)が現れます。本屋の出現は本の需要を増加させる結果となり、大量生産するために印刷方法も活字版から整版へと変化します。

元禄年間(1688~1704)に入ると多くの本屋が出揃い、林九兵衛(はやしきゅうべえ, 儒書), 村上勘兵衛(むらかみかんべえ, 仏書), 風月庄左衛門(ふうげつしょうざえもん, 儒書・医書), 秋田屋平左衛門(あきたやへいざえもん, 仏書・医書)などが代表的な本屋として挙げられ、その他にも、出雲寺和泉掾(いずもじいずみのじょう, 歌書), 永田調兵衛(ながたちょうべえ, 仏書), 西村九郎右衛門(にしむらくろうえもん, 仏書), 佐々木惣四郎(ささきそうしろう, 和学書)などがありました。

本屋の多い町筋は寺町・二条・五条橋(五条)の各通りで、この分布は当時の需要者と関係があり、二条通近辺には武家や公家が多いため古典や歌書が、寺町通や五条通には寺院が多いため仏教関係の本屋が並びました。

また、本屋の出現にともなって江戸中期には出版に関連する板木職・板摺工なども書店のまわりに集住しはじめます。

■ 書林仲間

寛永年間(1624～44)以降、本屋における出版が活発になりはじめると、売れ行きが良好な本を他の店がまねて印刷するという重版や類版の問題が起き、紛争の種となりました。この紛争を本屋の間で自主的に処理するために、出版業者の組合である京都書林仲間が元禄期に成立し、やがて町奉行によって享保元(1716)年に公認されます。

書林仲間は出版・販売者の加入が義務づけられていて、仲間中より2名が「行事」という役員に選出されました。行事は、4カ月交替制で正・5・9月に交替し、町奉行所への出版の許可、新刊書の重版・類版の処理、大坂・江戸の書林仲間との連絡などの事務に従事していました。

■ 草紙屋(そうしや)

出版書林の成立にともなって、小説や浄瑠璃本・絵本・絵図・啓蒙教訓書、また、諸技芸の教本などの「草紙」と呼ばれる図書の類を取り扱う草紙屋というものも出現しました。

貞享2(1685)年刊の『京羽二重』(きょうはぶたえ)には「歌書所并絵草紙」の店として、林白水(はやしはくすい、出雲寺)、喜左衛門(きざえもん)、与菱屋(よびしや)の三軒を挙げています。林白水は、二代目出雲寺和泉掾を相承した時元(ときもと)のことで、この出雲寺家は、儒者林羅山(はやしらざん、1583～1657)の遠縁にあたり、禁裏御用や『武鑑』出版など幕府御用もつとめました。

元禄期では、山本九兵衛(やまもときゅうべえ)、鶴屋喜右衛門(つるやきえもん)、八文字屋八左衛門(はちもんじやばちざえもん)が知られ、その中でも浄瑠璃本の販売書店として寛永期から幕末まで開業した鶴屋喜右衛門は、近松門左衛門作『心中天の網島』(しんじゅうてんのあみじま)『傾城反魂香』(けいせいはんごうこう)などを出版し、大坂で出版された浄瑠璃本(『曾根崎心中』<そねざきしんじゅう>『鍵の権三重帷子』<やりのごんざかさねかたびら>など)の京都販売元となりました。

なお、草紙屋も「草紙屋中」という仲間を組織しましたが、京都では仲間として認められず、書林仲間の監督下におかれ、草紙の出版には書林仲間行事の許可が必要でした。

■ 浮世草子と八文字屋本(はちもんじやぼん)

元禄時代になると、大坂の町人であった井原西鶴(いはらさいかく、1642～93)の『好色一代男』(こうしょくいちだいおとこ)に代表されるような浮世草子(小説)が需要者の間で流行し、京都でも西村市郎右衛門(にしむらいちろうえもん、嘯松子)や林義端(はやしぎたん)などの戯作者が登場します。

この頃、京都の浮世草子作家は本屋の主人や雑俳点者などで主として構成されていましたが、西鶴に対抗するだけの力量手腕のある作者は一人としておらず、浮世草子出版に関して、京都の本屋は西鶴著作を出版していた大坂の本屋の後塵を拝する状態でした。

しかし、元禄期の後半に江島其磧(えじまきせき、1666～1735)が登場すると京坂書林界の趨勢は大きく変動します。

元禄14(1701)年に其磧著の『傾城色三味線』(けいせいいろじゃみせん)という浮世草子が京都の草紙屋八文字屋八左衛門(はちもんじやはちざえもん)から発刊されると、瞬く間に大ベストセラーとなり、出版に成功した八文字屋から刊行される書籍は八文字屋本と呼ばれ、江戸中期の日本の出版界を風靡しました。

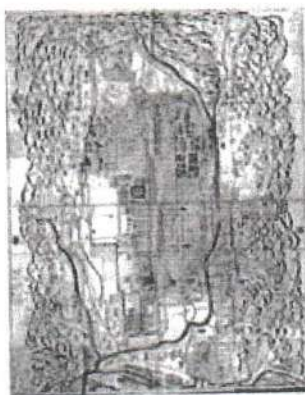
■案内書の刊行

京都の出版物の中でも特に有名なものに名所案内記(ガイドブック)の類があります。明暦4(1658)年に書林山森六兵衛(やまもりろくべえ)より刊行された『京董』(きょうわらべ)を皮切りに貞享2(1685)年に刊行された『京羽二重』(きょうはぶたえ)などたくさんの案内書が出版されました。中でも京都の商人吉野屋為八(よしのやためはち)が安永9(1780)年に刊行した観光案内書『都名所図会』(みやこめいしよずえ)は空前の売行きを見せ、その後、各地の名所図会が刊行されることとなりました。

■京絵図の出版

江戸時代の初期には、京都の市街地を克明に描いた京絵図(地図)も盛んに印刷されました。その中でも寛永元(1624)年前後に刊行された「都記」(みやこのき)は、現在知られる最古の京絵図です。

また、庶民の中で観光が流行しはじめ、種々のガイドブックが発行されると、それにともない名所の手引きや案内を書添えた観光マップが次々と出版されました。その中でも天保2(1831)年に竹原好兵衛(たけはらこうべえ)から刊行された「改正京町御絵図細見大成」(かいせいきょうまちおんえずさいけんたいせい)は、縦(南北)1.8メートルと刊行京絵図の中では最も大きく、細かい通り名から町名まで鮮明に印刷されており、今でもよく見かける京絵図の代表的なものです。



「改正京町御絵図細見大成」

■歩く・見る

■ 円光寺(えんこうじ) 左京区一乗寺小谷町

臨済宗南禅寺派の寺院で、瑞巖山と号し、本尊は千手観音です。

慶長6(1601)年、経世・治国の学問を好んだ徳川家康(1542~1616)が足利学校(栃木県足利市)の第九世庠主(しょうしゅ、校長)であった閑室元佶(かんしつげんきつ、1548~1612)を招き、足利学校の京都分校として伏見城下に創建しました。

当寺は国内教学の拠点として多くの朝鮮文書や木製活字を所蔵し、伏見版(円光寺版)と呼ばれる図書を出版しました。のちに上京区の相国寺山内へ移転し、寛文7(1667)年、現在地に移って南禅寺の末寺となりました。現在でも家康より寄せられた木活字(重要文化財)を所蔵しています。

■ 永田調兵衛(ながたちょうべえ) 下京区花屋町通西洞院(永田文昌堂<ながたぶんしょうどう>)

慶長年間(1596~1615)創業、屋号は丁字屋・菱屋と言い、京都において今日まで出版を続ける最古の本屋です。現存する同店最古の刊本として寛永6(1629)年出版の外山竹隠著『医教指南』(いきょうしなん)があります。

初代から三代目までは長兵衛、四代目より十代目まで調兵衛を襲名、最初は錦小路通新町西入に店舗を構えましたが、天明8(1788)年の大火後、現在地に移りました。諸種の図書を広く出版し、書籍目録の刊行でも知られています。

店舗移転以後は、西本願寺蔵版のものなど一向宗関係書をも出版しており、現在では永田文昌堂と称して各宗經典の出版と販売を行っています。

■ 佐々木惣四郎(ささきそうしろう) 中京区寺町通姉小路上る西側(竹苞楼<ちくほうろう>)

宝暦元(1751)年、姉小路通寺町西入北側に創業。屋号を銭屋、店号を竹苞楼と号し、初代春重は『茶経』などを出版、二代の春行は伴蒿蹊(ばんこうけい)・高芙蓉(こうふよう)・上田秋成(うえだあきなり)などの文人と親交を結び、国学や漢学の書籍を多数出版しました。その中でも『近世畸人伝』(きんせいきじんでん)は、今日でも多くの人々に愛読されています。

天明の大火で類焼し、享和元(1801)年に現在地に移転、五代目春吉の代(明治中頃)から出版業をやめて販売のみとなり、現在では古書を扱っています。

竹苞楼の建物は、元治元(1864)年の蛤御門の変で被災した直後に再建されたものを使用しており、幕末期の典型的な町家遺構を現代に残す貴重な建物となっています。

■ 村上勘兵衛(むらかみかんべえ) 中京区東洞院通三条上る(平楽寺書店<へいらくじしょてん>)

村上浄徳(むらかみじょうとく)が慶長年間に創業。当初は鞍馬口に店舗を構えますが、その後、二条通玉屋町や二条通車屋町角へと移転、文化年間(1804~18)に現在地に移りました。

二代浄清は俳書『はなひ草』などを出版、四代目の元信の時、深草に住んだ法華僧元政と親しくなり、日蓮宗の図書を出版します。寛文9(1669)年には武村市兵衛(たけむらいちべえ)・秋田屋平左衛門(あきたやへいざえもん)・八尾基四郎(やおじんしろう)と組んで法華宗門書堂を開き、日蓮宗書・天台学書など100点超える書物を出版、寛保元(1741)年からは単独で法華宗門書を発行するようになります。

日蓮宗関係以外にも医書や儒書など幅広く出版し、明治元(1868)年には新政府の御用書林となって『太政官日誌』(一種の官報)の発行に携わりました。現在では平楽寺書店の名前で業務を行っています。

■ 八文字屋自笑(はちもんじやじしょう)翁邸跡 中京区麩屋町通六角下る西側

江戸中期の浮世草子出版者である八文字屋自笑(?~1745)は、最初、説教本や浄瑠璃本を出版していましたが、元禄14(1701)年、江島其磧(えじまきせき)作の浮世草子『傾城色三味線』(けいせいいろじゃみせん)を刊行し、八文字屋本と総称される分野を開拓しました。その邸宅の跡には石標が建てられています。

草紙屋八文字屋は江戸中期最大の浮世草子出版店で、体裁・字体等にも工夫を施し、其磧の後には、和学者多田南嶺(ただなんれい)などに執筆を依頼、挿絵画家には京都で著名な浮世絵師だった西川祐信(にしかわすけのぶ)を起用しました。自笑以後は其笑一瑞笑一素玉と続きましたが、素玉の代になって所有の浮世草子板木を大坂の升屋大蔵に売却しました。



江戸時代の京都案内記

今回の「文献課の窓から」では、江戸時代の主な京都案内記の一覧を掲載します。これは3月20日まで開催した企画展「京の商いー『京』ブランドの今むかしー」で、「京」ブランドと京都案内記の出版がかかわっていることに注目し、作成・紹介したものです。

現在、世界的にも有数の観光都市として知られている京都の町は、日本において庶民による旅が一般的になり始めた江戸時代から、既にその魅力を全国の旅人にアピールしていました。多くの名所案内記、地誌、買物案内等が出版され、それらの京都案内記が京ブランドとなる数々の名産品の名を知らしめるとともに、京の

町自体の観光地としてのブランド名をもさらに高めています。

当時、庶民には物見遊山のためのみの旅は認められていませんでしたが、数多くの社寺を擁していた京都への旅は、参詣のための旅として旅人にその名目を与えました。

一覧にある資料は、すべて文献課で所蔵している資料です。名所の由来を詳しく記した資料もあり、300年以上昔の本から新しい知識を得ることが出来るのも、悠久の歴史と伝統のある京の町ならではの、と言えるでしょう。

図書閲覧室のカウンターで請求の上、ご利用ください。

江戸時代に出版された京都に関する主な地誌・名所案内・買物案内等（年代順）

タイトル	著者等	成立年	内 容 紹 介	所蔵
京 童	中川喜雲 編	明暦4(1658)	京都案内記の先駆け 京童が京都の名所を案内するという設定	●○
洛陽名所集	山本泰順 著	万治1(1658)	約300の名所の由緒・縁起を紹介（別書名：都物語）	○
京 雀	浅井了意 著	寛文5(1665)	『京童』に比べ実用的で、地域ごとに主な商売、寺社、名所などを案内	●○
扶桑京華志	松野元敬 著	寛文5(1665)	漢文体で書かれた山城国全体の地誌 社寺、自然、遺跡などを解説	○
京童跡追	中川喜雲〔著〕	寛文7(1667)	『京童』の作者による補遺 京以外に大和、摂津なども記す（別書名：跡追）	○
山城四季物語	坂内直頼 著	延宝1(1673)	山城国の年中行事を四季毎に紹介したもの	○
日次紀事	黒川道祐 著	延宝4(1676)	主に京における公俗の年中行事を解説（別書名：日次紀事）	○
出来齋京土産	浅井了意〔著〕	延宝5(1677)	主人公出来齋が京の寺社、名所を巡り各地で狂歌を詠む（別書名：山城名所記など）	○
京雀跡追		延宝6(1678)	『京雀』以後の町の発展をうけて、同書を増補したもの	○
京師巡覧集	丈愚 編	延宝7(1679)	漢文体による山城国の地誌 名所旧跡を詩を交えて案内（別書名：京都巡覧）	○
菟雲泥赴	北村季吟 著	貞享1(1684)	山城国全体の名所を解説 「つぎねふ」は「やましる」の枕詞（別書名：次嶺経）	○
京羽二重	水雲堂孤松子 著	貞享2(1685)	縦糸と横糸を緻密に織る羽二重のように京の歴史、町筋、名所、人物等を仔細に案内	●○
雍州府志	黒川道祐 著	貞享3(1686)	漢文体で書かれた山城国の地誌 地理、歴史、名所、くらしなど総合的に記述	●○
近畿歴覽記	黒川道祐 著	〔貞享期頃か〕	著者が『雍州府志』の調査のために各地を訪れた際の紀行文	○
京羽二重織留	水雲堂孤松子 著	元禄2(1689)	『京羽二重』に収録しなかった事項を追加した増補版（別書名：織留）	○
名所都島		元禄3(1690)	山城国の名所を山、川、野、古城など41部に分けて紹介 各所にちなむ和歌も付す	○
京独案内手引集		元禄7(1694)	『京雀跡追』の増補となる買物案内書 商職人の住所も書かれている	○
堀川之水	富尾似船 著	元禄7(1694)	著者の自宅、堰ヶ井通七条南鎌屋町付近の名所を案内 俳諧書の趣もある	●○
花洛名所記		元禄7(1694)	通ごとに町の名を記す 各町の商職人の様子を描いた挿し絵入り	●
洛陽洛外手引案内	愚定〔著〕	元禄7(1694)	寺社の由来、各通にある町名を記す 巻頭に宿一覽や公家、武家の所在も付す	●
花洛細見図	金屋平右衛門 編	元禄17(1704)	京の名所、風俗を図説『都名所図会』(1780)のモデルとなった（別書名：宝永花洛細見図）	●○
京城勝覧	貝原益軒 著 下河辺拾水 画	宝永3(1706)	京の名所を17日間で巡る順路を提示する案内記（別書名：京都めぐり）	●○
京内まいり	守拙斎 著	宝永5(1708)	京の神社仏閣を3日間で見て回れるようにまとめられた案内記	○
山城名勝志	大島武好 編	正徳1(1711)	およそ2700項目にわたり山城国の名所を過去の資料から引用して紹介	●○
山州名勝志	白慧 編	正徳1(1711)	著者が山城国を訪れて調査し、当時の状況を詳しく記した地誌	●○
都名所車		正徳4(1714)	洛中洛外の社寺、名所の紹介を記し、旅行者が回りやすいように配列したもの	●○
都すゝめ案内者		正徳5(1715)	公家、武家、社寺、呉服商、医者などの所在を記し、下巻は各町の案内となっている	●○
伏見大概記		享保13(1728)	数少ない伏見地区の地誌の先駆けとなるもの	○
山城志	関祖衡 編	享保19(1734)	山城国内の町村、名所旧跡、社寺、氏族について漢文で記した地誌	●
内裏難		〔享保年間〕	名所の解説と社寺の縁起を紹介している（別書名：京の花など）	●

タイトル	著者等	成立年	内 容 紹 介	所蔵
京羽二重大全		延享2(1745)	先に刊行された『京羽二重』、『京羽二重織留』の改訂増補版	●
新益京羽二重織留大全		宝暦4(1754)	『京羽二重』、『京羽二重織留』、『京羽二重大全』の改訂増補版	●○
山城名跡巡行志	浄慧 著	宝暦4(1754)	内裏から神社、仏閣、名所を巡りやすいように並べた案内記	○
祇園会細記		宝暦7(1757)	祇園祭を図説 山鉾を詳細に描写している(別書名:山鉾由来記 祇園御霊会細記)	●
京町鑑	白露 著	宝暦12(1762)	京の町並みを解説し案内する種々の町鑑の中でも代表的な書	●○
神社仏閣京都一覽	愚定〔編〕	宝暦13(1763)	寺社の由来、場所、領地を記す 三条大橋付近の宿も紹介(別書名:都名所手引案内)	●
水の富貴寄	橘井栄助 著	安永7(1778)	京名物の評判を記す 名物之部、大業之部、細工之部、料理之部など分類して紹介	○
都名所図会	秋里籬島 著 竹原信繁 画	安永9(1780)	京の名所案内記の代表作 大変好評で、籬島により多くの続編が刊行された	●○
伏見鑑		安永9(1780)	『京羽二重』を倣って書かれた伏見の地誌 この地域の地誌は少ない	●○
見た京物語	二鐘亭半山 著 菱川春童 画	天明1(1781)	幕臣であった二鐘亭半山が京に滞在していた際の見聞記	○
絵本此手柏		天明6(1786)	東山、北山など各地域の鳥瞰図や京の代表的な祭礼の様子を絵で紹介	●
拾遺都名所図会	秋里籬島 著 竹原信繁 画	天明7(1787)	好評であった前作『都名所図会』の秋里籬島による補遺版	●○
京の水	秋里籬島 編、 下河辺拾水 画	寛政2(1790)	京の町の起こり、宮殿、社寺、和歌に登場する名所などを解説	●○
都花月名所	秋里籬島 著	寛政5(1793)	花・月・雪・紅葉などの名所から京を紹介するユニークな案内記	●○
都林泉名勝図会	秋里籬島 著 佐久間草偃・西村 中和・奥文鳴 画	寛政11(1799)	主に社寺の庭園(林泉)を解説するが、庭園以外の名所も紹介されている	●○
東山西山洛陽京名所 あんない記		[寛政期頃か]	4丁(8ページ)の簡潔な案内記 焼失前の方広寺の大仏を紹介している	●
東山西山京名所案内記		[寛政年間]	『東山西山洛陽京名所あんない記』の改訂版か 表紙に寛政新板とある	●
橋渡漫録	滝沢馬琴 著	享和2(1802)	江戸の馬琴が上方を巡った際の見聞記 江戸人の見た京の様子が描かれる	○
神社仏閣都伊呂波分 早引	菅原輝恵 著 栄松亭主人 編	文化8(1811)	京の寺社霊場の位置、縁起を記し、いろは順に並べたもの	●
東山西山京名所独案内		[文化年間]	4丁の簡潔な案内記 表紙は当時珍しきから観光の目玉であった公家の様子	●
福額規範	速水春曉斎 編、合川 珉和・北川春成 画	文政2(1819)頃	神社の絵馬に描かれた図を紹介したもの	○
洛陽十二社靈験記	松浦星洲 著	文政10(1827)頃	12の社寺に祭られる神仏の縁起、功德を解説	●○
京案内道しるべ	池田東籬 編	文政12(1829)	6日間で京の名所を巡ることができるよう行程を記した案内記	●
増補都名所車	池田東籬 補著	文政13(1830)	1714年に刊行された『都名所車』をより使いやすいものとして編集しなおしたもの	●
商人買物独案内		天保2(1831)	品物をいろは順に並べ 目的の店を引けるように記した買物案内(別書名:京都買物独案内)	●○
京都順覧記	池田東籬 編	天保2(1831)	内裏図、屋敷、名所、旧跡の案内を記した地誌	●
京町小名鑑		天保9(1838)	通ごとに町の名を記す 携帯に便利な小型本	●
袖中 都名所記	池田東籬 編 井上春曙斎 画	天保10(1839)	袖に収まる小型の案内記 三条大橋から各名所までの距離が記されている	●
京名所独案内	池田東籬 編	天保12(1841)	社寺、名所、旧跡などを並べ、次の場所までの道のりを記したコンパクトな案内記	●
洛西嵯峨名所案内記	林峨山 著	嘉永5(1852)	嵯峨野一帯の名所を紹介し、和歌を付した名所案内記(別書名:嵯峨名所案内記)	○
花洛名勝図会	木村明啓・川喜多 真彦 編	文久2(1862)	『都名所図会』風の案内記で風俗も詳細に描写 東山之部のみ刊行(別書名:東山名勝図会)	●
花洛羽津根	清水換書堂 著	文久3(1863)	洛中洛外の寺社、自然などの名所を図を交えて案内(別書名:京羽津根、都羽津根)	●○
都商職街風聞		文久4(1864)	いろは順で京の商職を記す買物案内 314業種、1155軒を紹介	●○
増補華洛細見図絵	池田東籬 編	文久4(1864)	京の祭礼、社寺を図説した案内記 折本の形態で全てのページに図がつけられている	●

<凡 例>

- ・配列は成立年順による。
- ・成立年は『国書総目録』(岩波書店)、『日本歴史地名大系27 京都市の地名』(平凡社)、『京都大事典』(淡交社)によった。所蔵している資料のうち、上記の参考図書により成立年(初めて成立した年)が確定できなかったものについては、刊行年(増刷版、改訂版等)、その資料の実物が刊行された年)を記しているものもある。
- ・著者等の欄が空白のものは、著者等が不明の資料である。
- ・所蔵の欄の印は当館での所蔵状況を示し、●が版本(木版等によって印刷された原本)を所蔵している資料、○が翻刻(後に原本の文字を活字に直して出版したもの)あるいは影印版(原本を写真撮影し、出版したもの)を所蔵している資料を示す。
- ・当館で所蔵する版本が初版本でない場合もある。
- ・表中の〔 〕内の記述は、資料現物以外の情報源から推定して記入したことを示している。

平成13年度

近世史料館夏季展

江戸の旅—諸国めぐり—

期間：平成13年7月3日（火）～8月12日（日）

場所：金沢市立玉川図書館 近世史料館 展示室



箱根温泉の図 (『東海道名所図会』より)

金沢市立玉川図書館近世史料館

はじめに

江戸時代以前の旅

江戸時代は、農民や町人などの一般庶民により、社寺参詣や湯治などの旅が広く行われた時代であった。それ以前の旅は、貴族や武士、裕福な商人、上層農民など、経済的に余裕のある人々に限られていた。庶民の旅も全くないわけではなかったが、それらは、税を納めるために為政者から強要された旅であったり、病氣平癒のための苦行であったり、あるいは旅それ自体を生活の場とするもので、遊楽と呼べるものではなかった。また、道路や宿泊施設など、旅をするうえで基本的な交通環境も整っていなかった。

江戸幕府の交通政策

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、翌年、東海道の「伝馬制」を敷く。これは、江戸・京都間に宿駅を定め、幕府の公用文書や役人をそれぞれの宿駅に用意された人馬によって、宿駅から宿駅へ継ぎ送るシステムである。その後、全国の諸大名に参勤交代が義務化されると、一行の宿泊所として、本陣や旅籠などの宿が各宿場に備えられた。ここに、輸送機能と宿泊施設をそろえた宿場町が確立する。さらに、街道には一里塚(距離の目安)が築かれ、並木が植えられた。このように、交通環境が着々と整備され、旅行しやすい環境ができあがっていく。

江戸時代の旅

一方、世の中が安定し、商品経済が発達すると、庶民の生活も向上し、遠隔地へ出かけるゆとりができてくる。こうして元禄年間(1688~1703)以降、伊勢参宮など社寺参詣を目的とする旅が行われるようになった。その後、旅は次第に物見遊山的な要素が強くなり、文化・文政の頃(19世紀初頭)には、社寺参詣に名所めぐりや芝居見物などを加えた、今日の娯楽的な旅の様相に近いものとなったのである。

ところで、旅は江戸時代の庶民にとって最大の娯楽であったが、同時に危険を伴う大変なものでもあった。交通環境が整い、比較的安全になったとはいえ、街道筋には旅人を狙う追い剥ぎやスリが横行し、山道では獣に襲われる危険もあった。また、基本的に徒歩の旅であったため、日数がかかり、その分費やす費用も多かった。そのため、多くの庶民は講という組織に入って、講員が積みたてたお金を資金とし、講の代表として旅をする、という形をとった。

さらに、江戸時代は定住生活が基本であり、居住地から移動するためには領主の許可が必要であった。必ず身元証明書を携帯し、そこには旅行の目的や道中で死亡した場合の後始末についても書かねばならなかった。また、幕府や藩が設けた関所を通過する際には、関所手形が必要であった。(展示品 21、以下番号のみ記す)これは、「入り鉄砲

に出女」(幕府の中心江戸に武器を持ち込んだり、人質となっている大名の妻女が江戸から脱出する事)を警戒したためで、女性は必ず所持し、関所を通るたびに提出しなければならなかった。

このように様々な危険や制約があったが、庶民の旅は時代を経てますます盛んになっていった。それとともに、道中記や名所案内など、旅に関する出版物の刊行も増えていったのである。

旅と出版物

旅をする庶民が増加するにつれて、実際の旅行に役立つガイドブックのようなものが必要となった。この需要に応じて作られたのが、実用性に優れ、携帯に便利な、道中記・巡覧記・名所記などと呼ばれる旅行案内書である。これらは、旅路の宿駅・距離・駄賃・関所・名所旧跡などを記し、道中持ち歩きやすいように、小型の冊子や折本のような形をしていた。

道中案内書である道中記は、江戸時代のごく初期から出回っていた。17世紀半ば以降の旅の大衆化とともに、絵地図入りのものや、厚手の和紙の裏表に線引きの簡単な道中図を記した懐中用の簡便なものなど、様々な特色のあるものが生まれた。享保(1716～1735)頃からは、日本全国に街道を書き入れた、折本形式の道中記なども出始めている。(3・4)

また、江戸時代後期になると、道中記の中にも、より名所案内の記述が多いものが見られる。(8) このことは、庶民が、旅を物見遊山として捉えるようになった傾向を反映しているのであろう。こうして、名所図会^{めいしょとくえ}という、名所の景観や概要を知ること重点を置いた名所案内記が現れる。

名所図会は、街道や宿駅などの案内を簡単に解説する一方で、考証に裏付けられた名所・事物の由来を記し、さらに写實的な挿し絵によって、鑑賞にもたえ、地理的説明も可能な、新しいタイプの案内書であった。その趣向が評判となり、最初に刊行された「都名所図会」(安永9年(1780)刊)は、爆発的な売れ行きを見せ、以後、摂津(大阪)、伊勢、江戸などの名所図会が、次々と出版された。(11・12・13)

これら名所図会は、かなりの大冊であるため、道中に持参するには不向きであった。普段、机上において、旅行前に見所を調べたり、読み物として読んだりする、といった形で使われたと思われる。さらに、このほかにも名所案内としての性格を持つ刊行物が多数出版されている。(15・16)

このように、旅に関する出版物は、庶民の旅行熱を反映して、江戸時代末期に至るまで、新しく作られ、あるいは版を重ねていったのである。

展示資料目録

日本図

1. 日本全図 年代不明 098.9-47
 鋏形菟齋画。鋏形 齋は号で、本名は赤羽紹真という。ほかに、北尾政美などと号す。絵師北尾重政に入門し、挿し絵、錦絵などで活躍する。寛政 6 年（1794）美作津山藩の御用絵師となり、その縁で狩野派の画風も学ぶ。本史料は日本列島を上空から見た図である。
2. 大日本海陸全図 文久 4 年（1864） 22.2-80
 整軒玄魚編、東都 恵比寿屋庄七刊。編者は梅素亭玄魚とも号す、狂歌作者及び絵師である。本史料は、水戸の地理学者長久保赤水が作成した日本図の系譜を引くもので、実測図ではなく資料を元に作成された。緯度と経度が描かれている点が特徴である。

道中案内

3. 大日本早見道中記 年代不明 21.2-156
 富士谷東遊子校正、伏府 中西善右衛門他 8 名刊。全国の街道や宿場を記入しようとしたため、陸地の形はかなり歪められている。末尾には、主な街道の宿場間の輸送費が記されている。
4. 改正増補大日本国順路明細記大成 21.2-154
 弘化 3 年（1846）発行、嘉永 3 年（1850）開版
 東都 山崎久作校正増補。東都 甘泉堂和泉屋市兵衛刊。3 と同様、全国の道中図であるが、こちらは蝦夷から朝鮮半島まで範囲が及んでいる。展示は、旅行に関する情報提供の部分である。天気予測の方法、旅の持ち物、船や駕籠に酔わない方法などが記されている。
5. 諸国巡覧懷宝道中記 文化 5 年（1808）刊 21.2-151
 東都 須原屋茂兵衛他 1 名刊。表裏に道中の細かい道順を記入している。また、伊勢や四国、長崎など各名所ごとに絵地図が描かれている。
6. 東海道巡覧記 延享 2 年（1745）序 091.9-225
 盧橘堂適志編。京から江戸への下り道中記だが、上京する際には、後ろから読めば用が足りるように工夫してある。展示は、箱根宿より小田原宿までの部分。箱根関所の項目では、関所の開閉時刻、女性の関所手形改めがある事が記されている。

7. 明和改正新版 増補 日本汐路之記 明和7年(1770)刊 20.2-95

高田政度編。京都 額田正三郎・大坂 奈良屋長兵衛刊。海上の道中記。各航路における磯・島・瀬戸などの難所、港のよしあしなどを記す。展示は、下関より津軽青森まで北国廻りの航路上、能登国輪島港の部分。

8. 諸国道中たひ鏡 弘化4年(1847)刊 091.9-133

紫山加治禎胤著。東都 奎文房 和泉屋半兵衛版。和泉屋吉兵衛他 26 名発行。著者は儒学者で、松平定信に仕えた。序によれば、本書発行時点までに 67 回旅行をしたという。主に東海道と中山道の道中を記すが、箱根などの温泉や名所の絵図を多く挿入している。図は富士登山勝景全図。ほかに富士山頂上の図などが描かれている。

9. 従金沢至京都道中名所記 嘉永7年(1854)刊 098.0-46

金府 等願精舎蔵。金沢から京都にいたる道中の名所を記す。宿屋、駄賃などの情報は少なく、名所案内がほとんどである。展示は野町一里塚の部分で、二万堂川という川名の由来を記している。

10. 新板 金沢道中双六 年代不明 k7-129

一寿斎芳員画。江戸 和泉屋市兵衛板。

名所案内

11. 都名所図会 安永9年(1780)刊 13.9-56

全6巻6冊。京都 秋里籬島著、浪花 竹原春朝斎画。京都 吉野屋為八刊。名所図会の嚆矢となった作品。著者の籬島は、本書の好評を受けて、畿内近国や道中の名所図会を次々と書いていった。展示は、音羽山清水寺の全景。

12. 東海道名所図会 寛政9年(1797) 091.9-160

全6巻6冊。浪花 榊原喜兵衛他三都書林 10 名刊。秋里籬島著。鋏形蕪斎・竹原春泉斎等画。京都から江戸日本橋まで、下り道中の名所旧跡から歴史的事実や伝説、産業や名産まで述べている。展示は、中山道と東海道の分岐点近江国(滋賀県)草津である。

13. 江戸名所図会 文政12年(1829)序、天保5年(1834)刊 291.36-3

全7巻20冊内3巻10冊のみ。斎藤月岑著、長谷川雪旦画。須原屋茂兵衛他三都書林 13 名刊。江戸の町名主である斎藤家の親子が三代にわたって、調査、編述した本。実地調査及び写生に基づく内容で、史料的価値が高いと言われている。展示は、駿河町の呉服店越後屋付近である。

14. 江戸鳥瞰図 年代不明 大 964

鋏形蕪斎画、野代柳湖刻。江戸鳥瞰図の古典的な図柄である。

15. 京都順覧記 天保2年(1831)刊 21.2-218

全3冊。皇都 池田東籬亭編。中村有楽画。京都 竹原好兵衛刊。京都町中を散策する際の案内書。名所案内だけでなく、公家や大名の屋敷地まで分かるようになっている。また、巻末には、発行元の本屋竹原好兵衛が刊行した、他の道中記・絵図類の宣伝が掲載されている。

16. 浪華の賑ひ 文久3年(1863)発行 21.2-229

全3編3冊内2編のみ。鶏鳴舎暁晴翁編。松川半山画。大坂 河内屋喜兵衛他2名刊。大阪の名所案内記。展示は、道頓堀芝居小屋のあたり。

17. 浪花みやげ 嘉永6年(1853)新板 21.0-24

曙千角作。書林兼草紙屋 大坂 塩屋喜兵衛版。大阪土産として買われた番附(力士などを位付けし、その名を位順に記したもの)集。展示は、日本・中国内の雨や雪の名所を、相撲の番附になぞらえて、位付けしたもの。前頭8枚目に能登国宮崎山が位置している。

関・宿

18. 諸国定宿附 天保6年(1835)改 21.2-202

なには組 発起人 松屋源助編。道中の旅籠(食事付の宿)の中には、悪質なものが多かった。よって、旅人が安心して宿泊できる宿を提供するため、文化13年(1816)、大坂の松屋源助が発起人となり、浪花組という旅籠組合が作られた。当史料は、組合に加入した旅籠(定宿)の一覧で、旅人は、組合保証付きのこれらの宿には安心して泊まることができた。

19. 大坂ヨリ西京マデ道中判取帳 年代不明 21.2-230

大川組 船問屋世話人中編。船問屋らが同業者のために作った定宿帳。宿泊した宿で押印してもらう事になっていたため、判取帳という。

20. 境関所等之図 年代不明 16.78-49

境(越中国)、市振(越後国)、関川(同前)、碓氷(上野国)の各関所の絵図と、通過する際の心得などを示したもの。

21. 越中境関所通行切手 090-316

天保12年(1841)6月26日 北川屋豊右衛門

天保12年(1841)6月29日 大浦屋幸右衛門

関所を通過するときに必要な通行許可証。関所手形ともいう。このような切手は、関所を通過する前の宿屋で、発行を頼む事ができた。大浦屋幸右衛門は、金沢の宿屋である。

近世京都における旅人の観光行動

—旅日記と小型案内記との比較をととして—

谷 崎 友 紀*

I. はじめに

近世には、伊勢参詣や本山参りなどの旅が流行し、京都にも多くの旅人が訪れていた。旅人のためにさまざまな案内記が出版され、その中には持ち歩きができるように小型化され、モデルコースが示されたものもあった。それらの案内記は、特定の場所を「名所」として認識させるツールとして、今日の観光ガイドブックのような役割を果たしていたと考えられる。

これまで京都の名所研究は、案内記を中心に進められてきたといえる。たとえば矢守や山近は、案内記の分類という書誌学的な研究を行った¹⁾。山近は、そこで小型案内記と分類した案内記の実用性の検討も行っている。また菅井は、巡覧コースが示されており、洛中と洛外の区分を読みとることのできる案内記を対象とし、巡覧コースの特徴や実用性、当時の洛中洛外の認識についての検討を行った²⁾。これらの案内記の中には小型案内記も含まれているが、現実の巡覧を想定しているはずの小型案内記であっても、必ずしもすべてが現実に即しているわけではないとされている。

また塚本は、GISを用いて近世京都の案内記を網羅的に分析し、名所の掲載が変化する様子を明らかにした³⁾。ここでは、モデルコースが示された案内記の場合にコースから遠い名所は省略されてしまうなど、名所の掲載は案内記の体裁や性格に影響を受けることが明らかにされている。これらの既往研究では、名所案内記は東山を掲載の中心としており、この地域が名所見物の中心となっていたという見解が示されている。さらに長谷川は、『都名所図会』などから京都の名所は歌枕由来のものが多く、京都における名所観の根底には歌枕があることを明らかにしている⁴⁾。

一方、旅日記を対象としたものとしては、高橋⁵⁾や廣瀬⁶⁾の研究があげられる。高橋は東北地方から伊勢・上方方面への旅日記を、また廣瀬は東国の庶民による旅日記を分析対象としており、両者とも東山が名所見物の中心となっていたことを指摘している。さらに廣瀬は、案内記は土産物か今後の旅行のために購入され、参観経路の決定には影響しなかったという見解も示している。

このような案内記の利用に関しては、斎藤⁷⁾や金⁸⁾が検討を行っている。金は、案内記と旅日記の記述の類似性に着目し、旅日記の作

* 立命館大学大学院文学研究科・院生

キーワード：京都、旅日記、小型案内記、名所、観光行動

Key words: Kyoto, Travel Writing, Compact Guidebooks, Notable Place, Traveler Behavior

者が旅日記を増補・校正する際に案内記を参照していた可能性があることを指摘した。

さらに中島は、案内記や旅日記が出現する以前の京都見物に着目し、仮名草子を用いて検討を行った⁹⁾。仮名草子に登場する名所やコースから、名所案内記類が出版される以前に仮名草子が京都見物のモデルコースとして活用された可能性が指摘されている。

これらの既往研究の課題としてあげられるのが、旅日記と比較して案内記研究の比重が大きい点と、いずれも案内記と旅日記をそれぞれ個別に検討したものであり、両者を比較検討しているものも記述の類似性を指摘するにとどまっている点である。

案内記は当時の人々の名所に対するスタンダードな認識を反映したものだといえるが、案内記のみから人々の観光行動を検討するには限界がある。また、旅日記から旅人の観光行動を検討したものも、主な分析対象となる旅日記の年代や作者の身分に偏りがみられ、現在明らかにされている近世京都の観光行動は非常に限定されたものであり、近世をとおした検討が必要といえる。旅日記には実際の旅人の行動が記されており、その中には名所で宝物を見物したり、茶屋で土地の名物を食べたりといった娯楽的な行動も多数みられる。

本研究ではこのような旅人の行動を観光行動として定義し、多くの人々が観光を行った近世の京都を事例に、当時の観光の実態を明らかにする。

II. 時代背景と研究方法

1. 近世京都への旅

18世紀に入ると、東海道五十三次に代表

される諸街道の宿泊設備の充実、金・銀貨及び為替の流通などの経済的变化、駕籠などの乗物や荷物の輸送組織の発達、遊女などの遊楽施設の普及、盗賊の減少など交通環境の好転によって、旅は多くの人々の間に広まった。各藩では、物見遊山や他国旅行を抑制・禁止する動きもみられたが、人々は医療行為である湯治や宗教行為である社寺参詣を名目とし、旅に出るようになった¹⁰⁾。さらに、十辺舎一九の『東海道中膝栗毛』、仮名垣魯文の『滑稽富士詣』などの滑稽紀行文学の流行も、人々の旅への欲求に拍車をかけた¹¹⁾。

このように、近世には人々が信仰以外に旅自体を享楽するために出かけるようになり、観光的・遊楽的要素の強い旅の形態が発達し、旅のレクリエーション化が進んだ。

京都には各宗派の本山が集中していたため、京都は地方末寺の檀家たちが宗祖や遺跡を訪ねる目的地となり、多くの旅人が京都を訪れるようになった。京都の各寺はそれぞれの靈驗にちなんで開帳や縁日の修法を行い、それを年中行事として定着させて参詣客を集めた。三条大橋周辺には多くの宿屋が軒を連ね、宿屋では旅人を宿泊させるだけではなく、京都の地理・遊覧に不案内な旅人のために案内人をおき、効率的な京都の観光案内を行った¹²⁾。

その他にも、現在のガイドブックにあたる案内記がさまざまな形態で出版された。初期のものとしては、明暦4(1658)年に出版された文学的な色が濃いとされる中川喜雲編の『京童』、地誌的要素を兼ね備えた浅井了意による『京雀』(1665)や、節用集的地誌と位置付けられる水雲堂狐松子による『京羽二重』(1685)などがあげられる。寺社の縁起や名所歌を中心とし、名所記の要素が強く

表れたのは、山本泰順による『洛陽名所集』(1658)である¹³⁾。そして18世紀に入ったのち、その流れを汲んだより実用的な案内記として小型案内記が登場する。また、秋里籬島の文章と竹原春朝斎の挿絵による『都名所図会』(1780)が出され、その後も名所図会シリーズとして複数の案内記が出版されるなど人気を誇った。このように、近世をと

してさまざまな種類の案内記が断続的に出版され続けることから、いかに当時の旅人らにとって京都が魅力的な場所であったかが読み取れる。

2. 対象とする史料と分析手順

分析対象となる小型案内記は、山近¹⁴⁾によって小型案内記と分類されたものの中から、同一の内容であるものを除外した7点で

第1表 分析対象の小型案内記

書名	出版年	編著者	版元	形式	備考
京城勝覧	宝永3年 1706	貝原益軒	小川多左衛門・永田調兵衛・ 著屋宗八・平野屋茂兵衛	日割、17日+ 洛中+拾遺	現存は享保6年(1721)。 天明4年(1784)再版。
京内まゐり 都名所車	宝永5年 1708 正徳4年 1714		辻勘重郎 吉野屋為八	日割、4日+神社 羅列	宝暦5年(1755)再版。 享保15年(1730)、文政 13年(1830)再版。
都名所道案内 京案内道しるべ	安永9年 1780 文政12年 1829	君修 池田東籬亭	正本屋吉兵衛 丸屋善兵衛	方角別、6区分 日割、6日	
京都順覧記	天保2年 1831	池田東籬亭	竹原好兵衛	日割、6日	
京名所独案内	天保12年 1841	池田東籬亭	正本屋吉兵衛	方角別、3区分	竹原好兵衛版も有

第2表 分析対象の旅日記

番号	史料名	和歴	西暦	作者	職業・身分
1	所歴日記	寛文4年	1665	石出常軒	国学者・歌人
2	千種日記	天和3年	1683	未詳	儒者
3	日記六号	元禄4年	1691	貝原益軒	黒田藩儒医
4	佐藤善兵衛街道中記	元禄6年	1693	佐藤善兵衛	庄屋
5	東遊草	宝永元年	1704	谷重遠	土佐藩士・儒者
6	京都旅日記	正徳3年	1713	未詳	吉田藩士
7	伊勢参宮記	寛延2年	1749	小野甚平	下級旗本の隠居
8	遊洛記	安永9年	1780	頼梅颯	歌人
9	江漢西遊日記	寛政元年	1789	司馬江漢	画家
10	春莖道久佐	寛政4年	1792	山梨志賀子	歌人
11	思出草	寛政5年	1793	津村淙庵	学者
12	但州浴泉記	寛政12年	1800	伯邦	尾張藩士
13	伊勢参宮旅日記	文政6年	1823	未詳	農民
14	たびまくら	天保10年	1839	木内啓胤	武士
15	西国道中日記帳	天保12年	1841	未詳	農民
16	参宮一件諸控	天保15年	1844	未詳	農民
17	綺語文草	嘉永3年	1850	西沢一鳳軒	脚本・随筆家
18	西遊草	安政2年	1855	清河八郎	志士
19	在阪記事	安政4年	1857	栗原博洲	医師
20	道中日記手控書	安政6年	1859	未詳	農民
21	都紀行	元治元年	1864	萩原貞宅	幕臣
22	征西日記	元治元年	1864	伊庭八郎	幕臣(奥詰)

ある（第1表）。『京城勝覧』に関しては、現存している最古の刊本は天明4（1784）年出版のものであるが、本研究では金¹⁵⁾による成果に基づき、『京城勝覧』の出版年を序文が書かれた宝永3（1709）年とする。

もうひとつ対象となるのが、旅人が自身の旅の記録を記した旅日記である。近世には多くの旅人が旅日記を書き残している。旅をする際の心得を記した『旅行用心集』（1810）には、「道中にて日記認方之事」という項がある。ここには、「道中にて名所、旧跡を尋、風景の能所、又は珍敷物等見聞たるならば、何月何日何所にて何を見ると、有のまゝに書付もし、詩哥連俳の句、心にうかミたらバ、連続せずとも其趣を日記にしるし置へし。」¹⁶⁾とあり、旅をする際には旅の記録を記すことが推奨されていたことがわかる。

分析対象とする旅日記については、①2日以上 of 観光行動、②名所に関する記述が地名の羅列にとどまらない、という基準を設け22点選出した（第2表）。対象とする多くの旅日記には、何月何日にどの名所を訪問して何を見たかが記されている。中には、その場所で購入したものや食べたもの、宿代、案内人を雇った値段などが記されているものもある。

これらの小型案内記と旅日記の分析手順は以下のとおりである。まず、分析対象である小型案内記に掲載されている名所と、旅日記で旅人が訪問している名所とを抜き出して集計・地図化し、共通して掲載・訪問されている名所を明らかにした。また、両者を比較し、小型案内記が実際の観光行動においてどのように位置付けられるのかを考察した。

III. 名所の掲載と旅人の観光行動

1. 小型案内記に掲載されている名所

名所の掲載方法としては、『京城勝覧』『京内まわり』『京案内道しるべ』『京都順覧記』が日割ごとのモデルコースを設定している一方、『都名所道案内』『京名所独案内』は方角別に分けた掲載方法をとっている（第1表）。『都名所車』は、名所を分類することなく羅列



第1図 『都名所道案内』



第2図 『京都順覧記』

する形式である。『京城勝覧』では、洛中の名所が日割コースに組み込まれておらず、別に項目が立てられて掲載されている。また『京内まわり』では、コースに組み入れることができなかった有名な寺社や神社が別掲載されている¹⁷⁾。

まずは、小型案内記に名所がどのように掲載されているのかについてみていきたい。分析対象となる小型案内記は第1表に示したとおりであるが、ここでは具体例として既往研究で検討されていない『都名所道案内』『京都順覧記』『京名所独案内』を取り上げる。

『都名所道案内』は、安永9(1780)年に出版された(第1図)。編著者は君修、版元は正本屋吉兵衛となっている。これは、日割コースではなく6区分の方角別に名所を掲載している。洛中が最初に掲載されており、御所の紹介から始まる。それから次に東山、西山(嵯峨)と続き、宇治や山科は後ろの方に掲載されている。

次に、天保2(1831)年に出版された『京都順覧記』¹⁸⁾である(第2図)。編著者は池

田東籬亭、版元は竹原好兵衛である。この案内記では、6日間の日割コースが組まれている。御所から開始する1日目は、洛中の名所が網羅的に掲載されている。2日目は三条大橋周辺から始まり、詩仙堂などの洛外北東部から清水寺周辺までを掲載している。3日目は四条大橋周辺から始まり、東山の南部から伏見・宇治までが掲載されている。4日目は近江・鞍馬・貴船と上賀茂・下鴨神社が組み込まれている。5日目は広隆寺から始まって主に嵯峨の名所と、仁和寺周辺が掲載されている。そして6日目は、梅宮大社から始まり向日や山崎など南西の遠方に位置する名所が掲載されている。

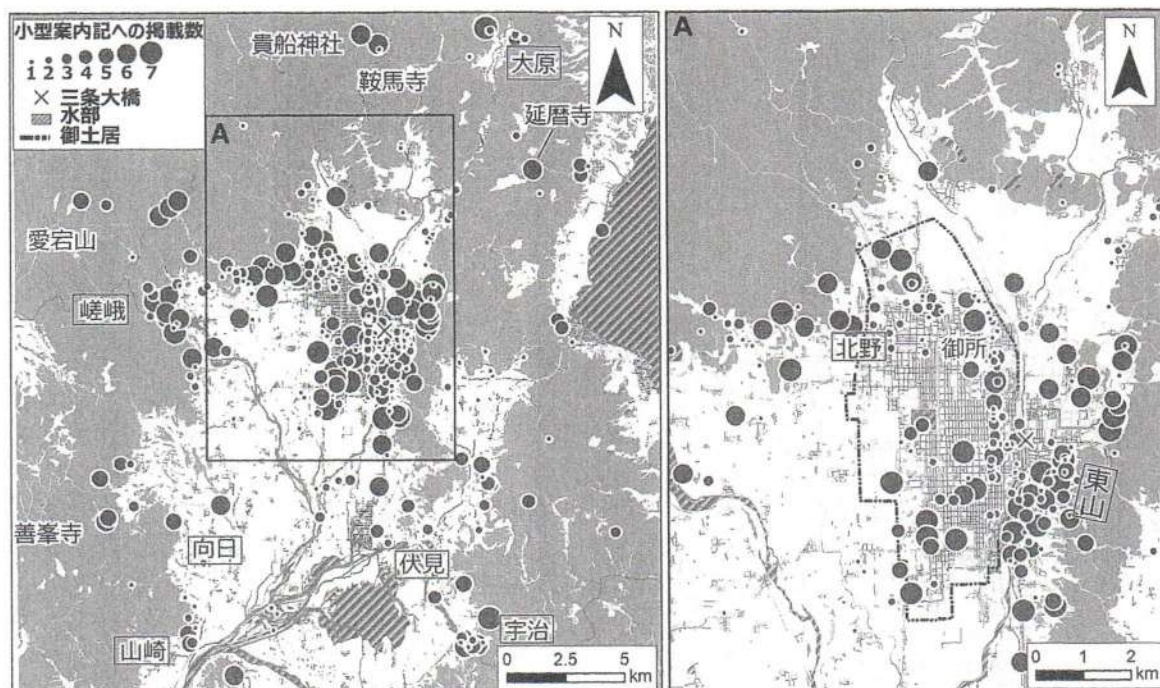
最後に、天保12(1841)年に出版された『京名所独案内』¹⁹⁾である(第3図)。編著者は、『京都順覧記』と同じ池田東籬亭、版元は正本屋吉兵衛である。この案内記は4区分の方角別に名所が掲載されている。最初は御所から始まり、東山と洛中の名所を網羅的に掲載している。ここには洛中の北部にある大徳寺や洛外の鹿苑寺、平野神社なども含まれている。次に「西之方」の名所として、広隆寺から梅宮大社・松尾大社を經由して嵯峨の名所や愛宕山、仁和寺周辺が掲載されている。その次は「東北之方」の名所であり、そこには近江・大原・鞍馬・貴船などが含まれている。そして最後に、「東南之方」の名所として伏見や宇治、石清水八幡宮までの名所が掲載されている。

このように、小型案内記によってコースの設定や掲載の方法にさまざまな違いがみられるが、共通しているのは洛中・東山の名所が優先的に掲載され、遠方の名所は後にまわされていることである。

また、第4図には、7点の小型案内記に掲



第3図 『京名所独案内』



第4図 小型案内記への名所の掲載数

載された名所をすべて集計したものを示した。これをみると、近江・山科・宇治などを含む広範囲の名所が小型案内記に共通して掲載されていることがわかる。その中でも特に掲載数が多いのは、東山の名所である。また、洛中の南部にある名所も掲載数が多い。これらに関しては、他の小型案内記を検討した既往研究でも同様のことが指摘されており²⁰⁾、小型案内記が作成される際に洛中と東山の名所が観光行動の中心として設定されたことは間違いのないと考えられる。

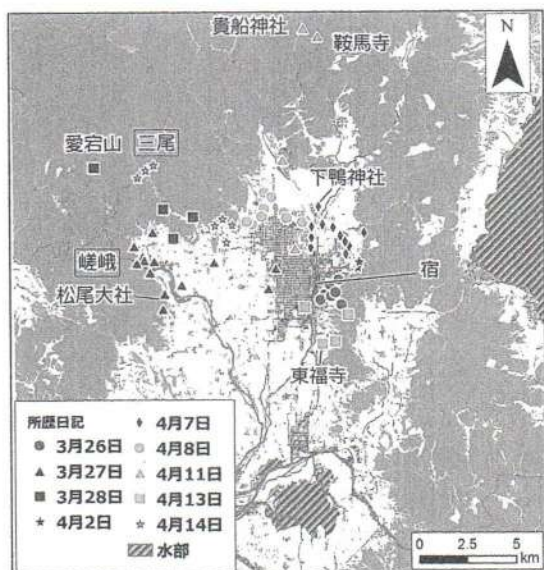
2. 旅人の観光行動

次に、いくつかの旅日記を例として実際の観光行動をみてみたい。まずは、寛文4(1665)年の『所歴日記』²¹⁾である(第5図)。これは、国学者である石出常軒によって書かれた日記で、3月24日に京都に着き、樵木町に宿をとった。26日から観光を始め、「先に近きあたりを」と東山の名所を訪問している。翌日は、北野を経由して嵯峨の名所をめぐっ

ている。開帳を行っていた清凉寺のほかに二尊院や戸難瀬の滝などを見たあと、松尾大社の方から壬生寺へ寄って帰宿している。翌28日は愛宕山へ登り、4月2日は下鴨神社とその周辺をめぐっている。7日には、吉田神社などの東山北部と、洛中東部の名所をめぐっている。8日には大徳寺などの洛中北部にある名所と北野天満宮などを訪れている。11日は、鞍馬寺とその道中の名所を訪問し、13日には東福寺とその周辺の名所をめぐっている。14日には神護寺・高山寺・西明寺を訪れているが、神護寺では寺の由来や清滝川を望んだ景色、紅葉の名所であること、地藏院のかわらけ投げについて詳細な記述があるのに対し、他の2ヶ所に関する記述は簡単なものであった。「三尾」と称されるなかでも、神護寺が名所としては際立っていたことがわかる。

次に、文政6(1823)年の『伊勢参宮旅日記』²²⁾である(第6図)。作者名はわから

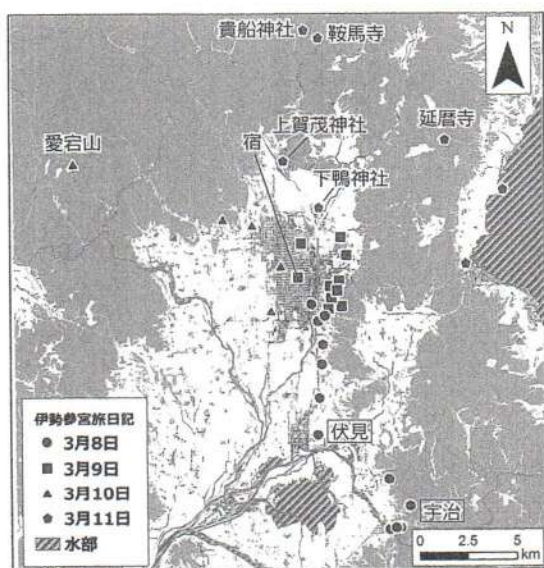
ないが農民であり、石巻からの伊勢参宮の帰りに京都を訪れている。3月8日に宇治の名所めぐりから伏見へ行き、伏見稲荷や三十三間堂などを訪れたあと、六角堂の前にある「縫物屋嘉兵衛」に宿をとっている。この宿は『京羽二重』にも「順礼宿」として掲載されており²³⁾、宿代は167文だったと記録されている。翌日は、「宿より地走」の案内人つきで、東山を中心に観光を行った。は



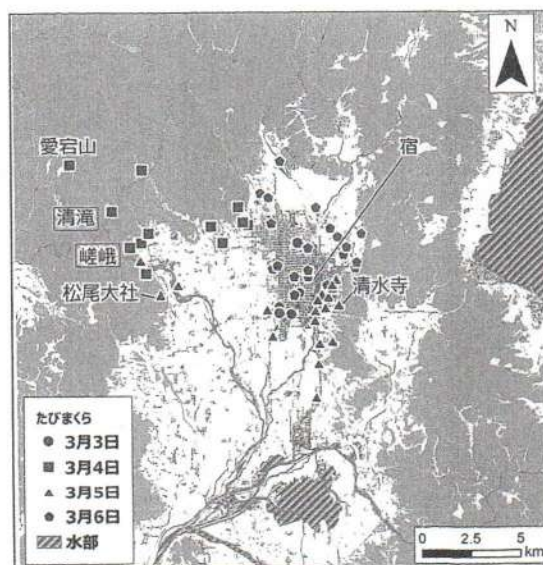
第5図 『所歴日記』の観光行動

じめに六角堂を訪れたあと、御所で36文の守札、300文の守錦を購入している。翌10日は、土産物を買うことに専念しており団扇や糸などを買い求めている。11日には北野方面に足を伸ばし、島原を見物してから愛宕山登山を行っている。その翌日には比叡山を抜けて大津に向かうが、その途中で上賀茂・下鴨神社や鞍馬寺・貴船神社へ立ち寄っている。この日記では、「委しくは京都名所記に見得たり」、「委しくは名所記=有」など、日記を読む際に何かしらの案内記を参照することを前提とした記述がみられる。

最後に、天保10(1839)年の『たびまくら』²⁴⁾である(第7図)。これは、主家の養子取りの使いに同行した武士である木内啓胤によって書かれた日記である。3月2日に大坂から京都へ入り、3日は東・西本願寺の御晨朝へ参詣したのち、御所での鶏合を見物に出かけている。この日は他に名所を訪れることはなく、三条にある「茶久」に宿をとる。この「茶久」は京都の中でも「人品不良の者は泊めず」²⁵⁾という格式の高い宿とされてい



第6図 『伊勢参宮旅日記』の観光行動



第7図 『たびまくら』の観光行動

た。啓胤が本格的に観光を開始するのは4日からで、この日は案内人を雇って北野を訪れている。滞在日数が短いこともあってか精力的な観光行動をとっており、嵯峨の名所をいくつか訪問したあとに雨中の愛宕山登山を敢行している。下山後は清滝の旅籠に宿泊し、翌5日は嵯峨から松尾大社・桂の渡しを経由して、東福寺など東山の南部から、清水寺など東山中部にかけての名所を訪問している。6日も案内人を雇い、本國寺や因幡堂などの洛中の南部の名所から始まり、本能寺など洛中の東部を訪れ、大徳寺のある洛北に行き、上賀茂・下鴨神社、吉田神社など名所を網羅的に訪れている。翌日には帰路につかねばならず、「余日なき故宇治・伏見の方見残せり。其外くらま・貴船へも不参」と悔しがっている。

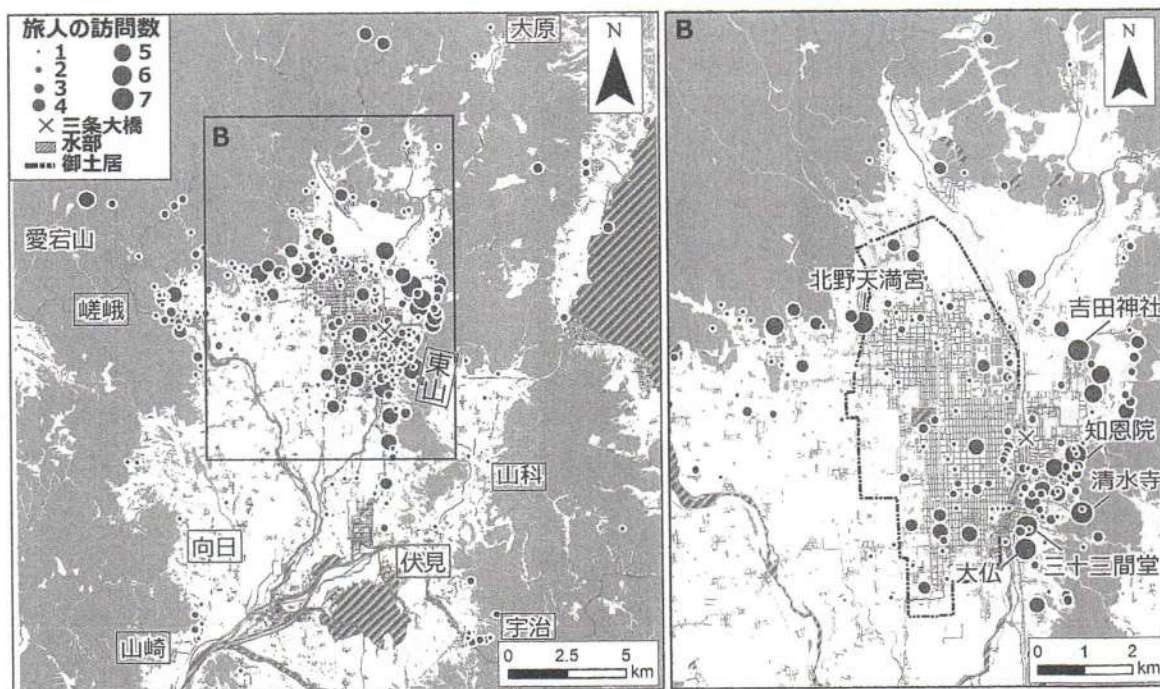
第5図～第7図をみると、いずれの旅人もそれぞれの観光行動の中で、東山の名所を訪れている割合の高いことがわかる。また、洛

中や遠方の名所を訪れていることは少ないが、鞍馬寺や愛宕山には訪問していることも特徴的である。

IV. 観光行動における小型案内記の位置付け

前章ではいくつかの小型案内記に掲載される名所と旅日記からみる実際の観光行動をみてきたが、小型案内記と観光行動の比較を行うことによって、当時のガイドブックであった小型案内記の位置付けを確認したい。

先述したように、小型案内記に掲載される名所は広範囲にわたっている(第4図)。一方、第8図は、分析対象となるすべての旅日記で旅人が訪問した名所を集計し、地図化したものである。例示した3点の旅日記の中で旅人らは頻繁に東山の名所を訪れていたが、これをもみても訪問数の多い名所が東山に集中していたことがわかる。また、三条大橋から遠



第8図 旅人の名所への訪問数

方に位置する名所にはあまり訪れない傾向がみられるが、愛宕山や鞍馬寺への訪問数は比較的多い。また、洛中の名所についても訪問数が少なく、東山の名所の中でも訪問数が多い名所と少ない名所があることから、名所の取捨選択が行われていることがわかる。訪問数が多い名所を順にあげると、知恩院、大仏（方広寺）、清水寺、三十三間堂、北野天満宮、吉田神社となり、これらは北野天満宮を除けばいずれも鴨川以東にある名所であった。

両者を比較してみると、小型案内記は実用に即しているとされているものの、実際の観光行動との間にはずれが生じており、小型案内記に共通して掲載されているからといって多くの旅人が訪問していたわけではないということがわかる。このような小型案内記

と観光行動との間でずれが生じている名所を示したものが第3表である。旅人の訪問数が多い順に並べられているため、上位にある場所は小型案内記と観光行動との間にずれがなく、そこは当時、「名所」として共通の認識があった場所だといえる。反対に、下位にある場所は小型案内記には掲載されているものの訪問数が少なく、旅人の間では「名所」とされていなかったか、何らかの都合で訪問することが難しかったと考えられる場所である。訪問数が少ない場所のうち、野宮神社は嵯峨、松尾大社・梅宮大社は洛中からみて南西部に位置している。三室戸寺は宇治、寂光院は大原の寺であり、これらはいずれも洛中から遠方に位置しているために宿からのアクセスが悪く、あまり訪問されなかったのではないかと考えられる。そのような遠方

第3表 小型案内記に掲載された名所への旅人の訪問数

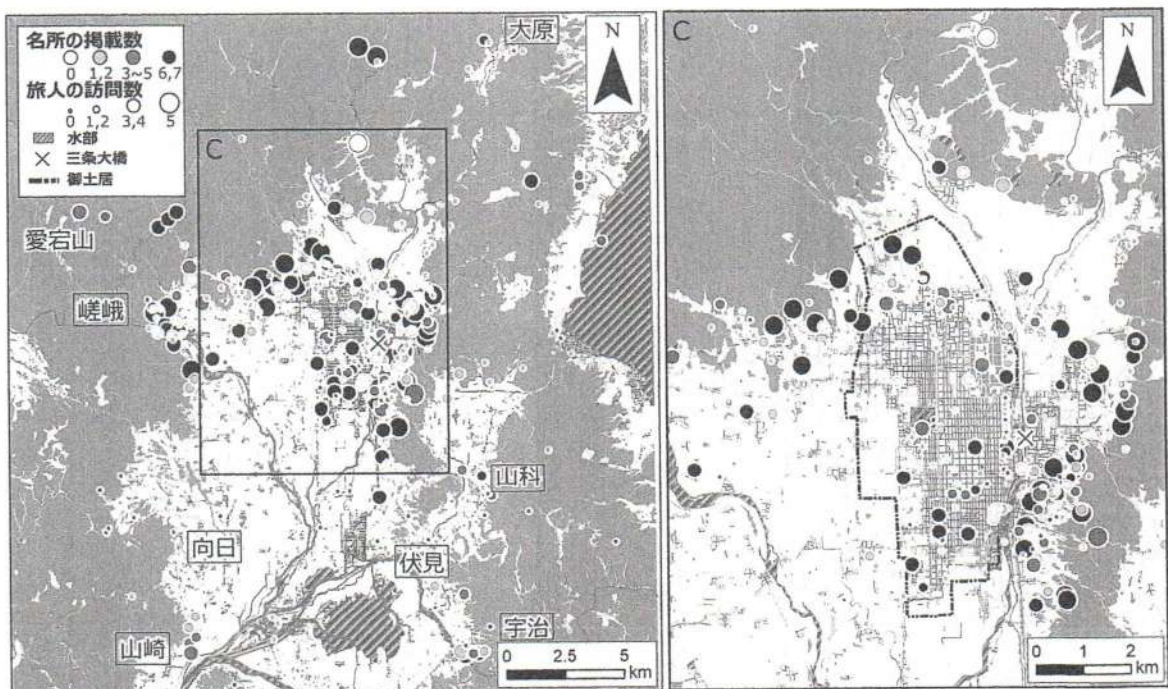
名所	訪問数	名所	訪問数	名所	訪問数
大仏	20	六角堂	13	二尊院	8
知恩院	20	伏見稲荷	13	誓願寺	8
清水寺	19	法観寺	12	東大谷	8
三十三間堂	19	御所	11	西大谷	8
北野天満宮	18	鹿苑寺	11	比叡山	8
吉田神社	18	貴船神社	11	広隆寺	8
祇園社	17	上賀茂神社	11	壬生寺	7
黒谷	17	大徳寺	10	長楽寺	7
仁和寺	17	妙心寺	10	法然院	7
真如堂	16	銀閣寺	10	野宮神社	7
下鴨神社	15	龍安寺	10	因幡堂	7
東福寺	14	法輪寺	10	草堂	6
東本願寺	14	東寺	10	松尾大社	6
西本願寺	14	今宮神社	10	梅宮大社	5
知恩寺	14	平野神社	10	誠心院	5
清涼寺	14	藤森神社	10	相国寺	4
愛宕山	13	高台寺	9	三室戸寺	4
建仁寺	13	天龍寺	9	仏光寺	3
六波羅蜜寺	13	本國寺	9	寂光院	2
南禅寺	13	双林寺	9		
永観堂	13	泉涌寺	8		

にある名所の中で、愛宕山や清涼寺には半数以上の旅人が訪れている。愛宕山は、『たびまくら』の作者のように、多少無理のあるように見える行程でもルートに組み込まれていた。嵯峨の清涼寺は、『所歴日記』の例からもわかるように開帳が盛んな寺であり²⁶⁾、それが旅人を集める要因になったのではないかと考えられる。また御所は、小型案内記で巡覧の起点とされており、観光名所となっていたことが指摘されている²⁷⁾。実際に旅日記をみると、『伊勢参宮旅日記』では御所で土産物を購入した事例が、『たびまくら』では御所での行事を見物に出かけた例がみられる。

一方、小型案内記に掲載がないのに旅人が訪問している名所はいくつかみられるが、いずれも訪問数は少なかった。このことから、多くの旅人が訪問する主な名所は、小型案内記にも共通して掲載されていたという点が指摘できる。

小型案内記への掲載数が多いにも関わらず旅人が訪れていないというずれが生じる原因は、小型案内記が名所をある程度網羅的に掲載する性格を持っていたからだと考えられる。これは、『京内まわり』の中に掲載されつつも、「見物所なし」と書かれる名所があることからわかる²⁸⁾。しかし反対に、旅人の訪問数が多い名所は、小型案内記に共通して掲載されていた。つまり、旅人は、小型案内記に掲載された名所の中から名所を選択して観光行動をとっていたといえる。

最後に、小型案内記が出版される以前の観光行動についてみておきたい。第9図は、小型案内記出版以前に京都を訪れた5人の旅人の訪問した名所と、その名所が後年小型案内記に掲載されているかを示したものである。図から、5人の旅人が全員訪れた場所は、後に名所として小型案内記に共通して掲載されていることがわかる。つまり、小型案内記が出版される以前に京都の観光行動のひな



第9図 小型案内記出版以前の訪問名所数

形はある程度定着しており、旅人たちも訪れるべき名所をすでに認識していたことがわかる。このような近世初期に京都を訪れた旅人の中には、小型案内記の『京城勝覧』を記した貝原益軒のような学者も含まれており、近世初期の観光行動が後世へ受け継がれていくにあたって、小型案内記がその一端を担ったものと考えられる。小型案内記は観光行動を決定する要因にはなり得ず、旅人に訪問すべき名所の選択肢を提示する役割を持っていたといえる。

V. おわりに

本研究では、近世京都における観光行動を明らかにするために、案内記だけではなく、案内記と旅日記とを合わせた検討が必要であるという既往研究の課題に対し、実用に即していたとされる小型案内記と旅日記の比較分析を行うことで、近世京都における旅人の観光行動と小型案内記の位置付けについて検討してきた。

その結果、小型案内記は実際に旅人が訪問しているよりもはるかに多い名所を掲載しており、実際の観光行動とはずれが生じていることを明らかにすることができた。また、近世京都において観光行動の中心となっていた東山の中でも、旅人が名所の取捨選択を行っていたことがわかった。小型案内記と旅日記の間でずれが生じているのは洛中から遠方に位置する名所が多く、旅人が名所を選択する際に名所へのアクセスのよさが関係していたことを窺わせる。また、遠方にあるにも関わらず多くの旅人が訪れている名所は、旅人にとって優先度の高い名所だったと考えられる。小型案内記は旅人に名所に対す

る共通認識を与えたものといえるが、観光行動の際に名所を選択する要因にはなり得ず、旅人に名所の選択肢を提示するものであったといえるだろう。

京都における主な名所は、小型案内記が出版される以前の近世初期にすでに訪問されていることから、この時点で京都の名所がある程度確立していたものと考えられる。また、旅人の訪れている名所は現在でも人気のある場所であり、近世にはすでに京都観光のひな形が形成されていたといえるだろう。

今後は、小型案内記と旅日記の内容をあわせて検討することで、近世京都における観光の実態をより正確に把握することができるものと考えられる。また、小型案内記以外の案内記や地誌などもあわせて検討し、京都の名所が規定された要因や、旅人の観光行動の根底にあるものを明らかにしていく必要がある。

〔付記〕本研究の地図の背景図は、国際日本文化研究センター・山田奨治教授が作成した「2万分1正式図」のベクタデータを利用して作成しました。記してお礼申し上げます。

また、本稿をまとめるにあたり、ご指導頂きました片平博文先生をはじめとする立命館大学地理学教室の先生方に厚くお礼申し上げます。

本稿は2013年度に提出した立命館大学大学院文学研究科地理学専修の修士論文の一部を修正したものである。

注

- ①矢守一彦「名所図会とその周辺」、(矢守一彦編著『古地図と風景』、筑摩書房、1984、所収)、69-88頁、②山近博義「近世名所案内記類の特性に関する覚書—「京都もの」を中心に—」、地理学報34、1999、95-106頁。
- ②菅井聡子「近世京都の名所案内記の順路設定にみる「洛中」「洛外」認識」、日本建築学会計画系論文集579、2004、163-170頁。
- ③塚本章宏「近世京都の名所案内記に描かれた

- 場の空間的分布とその歴史の変遷」、GIS—理論と応用 14-2、2006、113-124 頁。
- 4) ①長谷川奨悟『『都名所図会』にみる 18 世紀京都の名所空間とその表象』、人文地理 62-4、2010、60-77 頁、②長谷川奨悟「近世上方における名所と風景—秋里藤島編『都名所図会』『摂津名所図会』を中心に—」、人文地理 64-1、2012、19-40 頁。
- 5) 高橋陽一「多様化する近世の旅—道中記にみる東北人の上方旅行—」、歴史 97、2001、105-133 頁。
- 6) 廣瀬優也「旅日記からみた近世の京都参観」、愛大史学—日本史・アジア史・地理学—16、2007、29-56 頁。
- 7) 齊藤智美「旅先に対する情報の蓄積と認識の変化の考察—近世の江戸と京都を事例として—」、旅の文化研究所研究報告 15、2006、81-93 頁。
- 8) 金 延恩「近世案内記における観光モデルコースの登場—貝原益軒『京城勝覧』から見えるもの」、日本研究 41、2010、73-102 頁。
- 9) 中島伸吾「近世初期の京都見物について—仮名草子の分析を中心に—」、佛教大学大学院紀要文学研究科篇 42、2014、137-150 頁。
- 10) ここでいう旅とは、信仰をメインとした旅と、観光をメインとした旅の両方を指す。
- 11) 新城常三著『庶民と旅の歴史』、日本放送出版協会、1971、3-212 頁。
- 12) 鎌田道隆「近世京都の観光都市化論」、(鎌田道隆『近世京都の都市と民衆』、思文閣出版、1996、所収)、255-273 頁。
- 13) 前掲 1) ②。
- 14) 前掲 1) ②。
- 15) 前掲 8)。
- 16) 今井金吾解説『旅行用心集』、八坂書房、1972、64 頁。
- 17) 前掲 1) ② 363 頁。
- 18) 古典籍総合データベース <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html> 2014 年 4 月 3 日閲覧。
- 19) 京都地誌データベース <http://www.dh-jac.net/db1/books/kyofu/index.html> 2014 年 4 月 3 日閲覧。
- 20) 前掲 1) ①および 2)。
- 21) 駒 敏郎・村井康彦・森谷尅久編『史料京都見聞記 1』、法蔵館、1992、14-35 頁。
- 22) 石巻市編さん委員会編『石巻の歴史 9』、石巻市、1990、524-559 頁。
- 23) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書 2』、臨川書店、1970、237 頁。
- 24) 駒 敏郎・村井康彦・森谷尅久編『史料京都見聞記 3』、法蔵館、1992、192-222 頁。
- 25) 宇佐美英機校訂『近世風俗志(守貞謄稿) 1』、岩波書店、1996、218 頁。
- 26) 比留間 尚「回向院の開帳」、(比留間 尚『江戸の開帳』、吉川弘文館、1980、所収)、55-63 頁。
- 27) 前掲 2)。
- 28) 旧真如堂、若王子神社、安養寺、長楽寺、双林寺、高台寺、七観音院、興正寺、智積院、養源院、妙法院、今熊野、泉涌寺、金閣寺などがこれに該当する。

明治前期の名所案内記にみる 京名所についての考察

長谷川 奨 悟

- I. はじめに
- II. 明治期の京都で刊行された地理的知識を取り扱う書籍の刊行動向と分析対象
 - (1) 刊行動向の特徴とそのコンテキスト
 - (2) 分析の対象
- III. 明治10年代の名所案内記の特徴
 - (1) 『開化絵入京都見物独案内』について
 - (2) 『花洛名所独案内記』について
 - (3) 『京都名勝一覧図会』について
- IV. おわりに

I. はじめに

明治18(1885)年、文字富之助^{もじとみのすけ}が編纂した『開化絵入京都見物独案内』は、京都・大阪・東京の3地域で計8ヶ所の発売所から刊行された。表題に「開化」と明記されたこの名所案内記には、明治初期に新設された西洋風の建築物や鉄橋が京都の「新名所」として紹介されており、名所の近代化や名所観の変遷を考えるうえで大変興味深い内容となっている。野間光辰は、『新選京都叢書』に収録するにあたり本書の内容を精査し、明治前期京都の近代化をみる上で有益な資料の一つであると、「解題」において高く評価している¹⁾。

本研究の中心的な関心は、明治前期京都で刊行された名所案内記²⁾や地誌など、地理的な知識に関する書籍の中に叙述される、「名所」・「名勝」といった場所認識とその表象化

に関する考察にある。近代の案内記類³⁾や地誌の系譜に関する考察、もしくは近代を対象とした名所研究には以下のようなものがあげられよう。研究史の整理と展望は別稿とし、ここでは研究動向の一例を述べるに留めたい。

まず、案内記類や地誌の系譜に関する論考は、道中記や旅行案内記について分析した山本光正⁴⁾や、岩佐淳一⁵⁾の成果が注目されよう。彼らが系譜を考察するに当たって分析対象とした資料は、鉄道沿線案内といった掲載地域が広域にわたるものばかりであり、それ以外の特定の地域に特化した名所案内記の系譜について考察したものは管見の限りではほとんどみられない。一方で、近代を対象とした名所研究は、例えば羽生冬佳⁶⁾や馬場知子⁷⁾らの論考に代表されるように、東京の都市景観や風景の変遷に関するものや、地方では西田正憲⁸⁾の瀬戸内に関する風景や風景観に関するものなどがあげられるだろう。しかし、ここでの名所研究では、筆者が関心を寄せている近畿地方（近世は上方とされた地域）における名所観や風景観についての検証は、ほとんどおこなわれていないようである。

次に、地理学的な立場からは以下のようなものがあげられる。例えば、都市の近代化と「近郊の名所」の創出について論じた加藤政洋⁹⁾や、絵葉書と写真帖から風景の生産と風景の実践について論じた島津俊之¹⁰⁾らの研究成果がある。また最近では、奈良県の「府

キーワード：名所、近代化、明治前期、京都、場所認識

県写真帖」や、「奈良名勝写真帖」について分析した三木理史¹¹⁾の研究成果や、近代都市史研究の視点から繁昌記に分析対象としての意義付けを試みた網島聖¹²⁾の成果があげられよう。これらは、主に明治後期以降の刊行物を分析の対象としており、本研究が扱う明治前期の刊行物について、詳しく言及したものはない。また、刊行物の内容の変化や、その社会的背景について、近世と近代との差異や連続性をめぐる議論は未だ着手されていないといえよう。

本研究が分析の対象としている京都については以下の研究成果があげられる。刊行された案内記類や地誌のうち、先述した『開化絵入京都見物独案内』など、『新選京都叢書』に収録されているものには、野間による「解題」が付けられている¹³⁾。それ以外で名所案内記や地誌を分析対象としたものは、管見の限りで工藤泰子¹⁴⁾による論考のみであった。工藤は、明治期の京都における観光政策の有り様を明らかにすることを目的とし、明治28(1895)年に開催された第4回内国勸業博覧会及び平安遷都千百年記念祭に合わせて京都市が編纂した名所案内記について検討している。しかし、ここでは民間によって刊行された商業ベースのものについてふれられておらず、また、開催前後の比較検討がなされていないなど、近代の京都における名所案内記の刊行動向とその社会的、ないし文化的背景やその文脈を考察するうえでは十分であるとはいえない。

また、近代京都における名所案内記の特徴について、近代史の立場からいくつかの資料を分析対象として、そこに叙述される「桜」に着目し、近代化やその表象について言及したのが高木博志¹⁵⁾であり、彼の研究成果は大変興味深いものである。ことに、高木は笠原一人¹⁶⁾の研究成果をふまえたうえで、明治期の刊行動向と特徴について、明治10年代の名所記が近世における名所記との内容的

な連続性が強く、一つ一つが個性的な叙述であつたのとは違い、1895年以降の観光ガイドブックは、量と種類は多いが内容の叙述がパターン化した」(下線部は筆者の加筆)と指摘している¹⁷⁾。しかし、高木論文では、これに関する具体的な事例が示されておらず、笠原の研究成果に依拠することを述べるに留めている。また、笠原論文においても、この指摘に関する刊行動向や、その特徴をめぐる詳細な検討はみられないことから、再考の余地があるように思われる。本稿では、この点について取り組むにあたっての前段階として、上記の高木論文の引用部分における下線部分をめぐって再考察を試みることにしたい。

明治前期の「京名所」をめぐる場所認識や編者のまなざし¹⁸⁾についての検証を進めるにあたっては、当時の京都が置かれていた社会的・文化的背景や、物質的な都市の近代化や風景の変容などに関する既存の研究成果¹⁹⁾を俯瞰することが重要となろう。そして、明治初期から府知事として京都の近代化を主導した横村正直、北垣国道、また、山本覚馬ら京都府に奉職した知識人、郷土の篤志家たちの近代をめぐる思想と実践をめぐる研究成果²⁰⁾をおさえておくことも必要であろう。ここでは、明治前期の京都の状況と、同時期の名所旧跡について概観するに留めておきたい。

明治2(1869)年の東京奠都は、天皇という京都人の精神的支柱を失わせ、これまで「輦轂の余沢」と評された経済効果に大打撃を与えるなど、「京」ブランドや京都の価値を著しく低下させることとなった²¹⁾。明治8(1875)年の引裂上知は近世の名所地誌本²²⁾に数多く立項され、「京らしさ」²³⁾として表象されてきた寺社の壮観な風景を破壊し、経済基盤を著しく衰退させる結果となった²⁴⁾。

明治初期において、横村正直ら開明派の官僚が推進した京都の近代化政策は、東京・大坂と並ぶ地位の保全、幕末の市中焼失以来、京都が衰退していく状況において、最良の打

開策として、また文化の発信源でありつづけるために手を尽くしたものとされている²⁵⁾。このような現状において、京都では実に多くの案内記類や地誌が編纂されていくのである。

元来、名所案内記は地誌の一形態と位置づけられてきた²⁶⁾。ことに、「場所」や「地理的知識」を取り扱う名所案内記や地誌という伝統的なメディアでは、新しく編纂するにあたり、場所や景物に関する叙述内容については、既存の内容をふまえることが慣習となっていた。したがって、名所案内記を研究対象とする場合にも、同時期の地誌に関する研究成果もふまえなければならない。そこで、近代における各地の地誌編纂の動きについてみた場合、例えば京都府下など行政の管轄区域に関する地誌編纂では、島津²⁷⁾や石田龍次郎²⁸⁾が指摘するように、政府によって明治初頭に開始された国家政策としての『皇国地誌』編纂事業との関係や、その影響を受けての実践であることが推察できよう。そして、行政によるこれらの地誌編纂事業の影響は、民間の書肆による地誌や名所案内記の編纂とその刊行事業へと波及したしたものとも考えられる。

また高木は、近代では古跡・名勝をめぐる「場所の物語」やその価値の評価と保存、顕彰と活用を取り巻く環境が、近世までとは別の意図を付加されていくようになると指摘する²⁹⁾。このように、名所案内記に叙述される名所や名勝をめぐる背景には、当時の京都がおかれた歴史的・社会的状況をはじめ、実に様々な要素が複雑に絡み合っている。そして、近代の名所研究を進めるにあたっては、中西僚太郎³⁰⁾や関戸明子³¹⁾らによって構築されつつある「名勝図」などの俯瞰図・鳥瞰図に関する研究成果³²⁾にも注視する必要があるものと思われるが、これらをふまえての検証は今後の課題の一つとしたい。

本稿では上記の点を鑑みつつ、明治前期に刊行された名所案内記を分析対象とし、近代

京都における名所研究を進めるにあたって、隣接分野においても共通する関心事項の一つとなっている、名所(名勝)として取りあげられる場所とその叙述内容の特徴について検証することを目的としたい。この検証作業を通じて得られた知見から、先行研究では検討されることのなかった、明治前期の京名所をめぐる場所認識や名所案内記の編纂という実践について、その様態や文化的コンテクストの一端を詳らかにすることで、本研究成果を名所研究における学際的な議論の俎上に乗せるとともに、近代京都における名所研究の進展に寄与できればと考える。

より具体的には以下2点について取り組む。第1に、明治期の名所案内記の叙述内容に対しての、高木による「明治10年代の名所記が近世における名所記との内容的な連続性が強く」という指摘について、個別具体的な名所案内記の検証から得られる知見に基づいて再検討を行うことである。本稿では、まずその前段階として明治期における案内記類や地誌といった地理的知識を取り扱う書籍全般についての刊行動向と、その特徴について検証する。

第2に、明治前期の京都で刊行された名所案内記について、次に示す複数の名所案内記の内容を比較しながら検証する。ここでは、名所案内記編纂者の名所へのまなざしに注目しつつ、明治前期における「京名所」をめぐる場所認識とその実践の様相について考察する。

取りあげる名所案内記の詳細は後述するが、検討する名所案内記の1つ目は、本稿で中心的な関心を寄せている明治18(1885)年刊行の『開化絵入京都見物独案内』である。本書については、冒頭で示した野間の指摘³³⁾にもあるように、明治前期京都の近代化にともなう名所の変化を検証する上で、有益な資料であることは前述の通りである。その叙述内容に対する検証から、概ね明治10年から12

年の前半辺りの様相であると推測されるため、これとほぼ同時期に編纂・刊行された名所案内記と比較検討することで、当時の名所案内記に叙述される明治前期の京名所の表象の様態とその特徴の一端が明らかになるものとする。より具体的には、明治13（1880）年刊行の『花洛名所独案内記』、同年刊行の『京都名勝一覧図会』を分析の対象とする。

Ⅱ. 明治期の京都で刊行された地理的知識を取り扱う書籍の刊行動向と分析対象

（Ⅰ）刊行動向の特徴とそのコンテキスト

明治期の京都における名所案内記の刊行動向と特徴について、高木が興味深い指摘しているのは先述の通りである³⁴⁾。この指摘は、近代京都の名所案内記や地誌の刊行動向、それらの系譜を考察しようとする際に極めて重要な指標となろう。本稿では、これに関する再検討を行うための前段階として、『京都出版史』³⁵⁾及び、京都府立総合資料館の所蔵目録である『京都府資料目録』³⁶⁾を用いて、明治期の京都において刊行された案内記類や地誌といった地理的知識を取り扱う書籍の刊行動向について整理した。

これらによると、明治期の京都において民間から刊行された書籍の総数は、少なくとも計10,069冊を確認できる³⁷⁾。このうち、案内記類³⁸⁾や地誌といった地理的知識を取り扱う書籍の刊行数は、計203冊を確認でき、これは近世を通じて刊行された名所地誌本の総数である計131冊よりも豊富であった。

表1は、上記のような地理的知識を取り扱うものについて、書籍名と叙述内容を精査して、案内記³⁹⁾、地誌⁴⁰⁾、写真帖、その他の書籍⁴¹⁾の4つに分類したものである。これによって、明治期におけるこの種の書籍の刊行動向とその特徴が把握できるものとする。

表1から明治期のこの種の書籍に関する刊行動向についてみた場合、少なくとも3つのピークがあるものと思われる。まず、計11冊

表1 明治期の京都で刊行された地理的知識やその情報を扱う書籍の刊行動向

西暦	明治	①	②	③	④	計
1868	1		1			1
1869	2				1	1
1870	3	1				1
1871	4	1				1
1872	5	2				2
1873	6	2				2
1876	9	4	1		3	8
1877	10	2	3		6	11
1878	11	3	1			4
1879	12		2			2
1880	13	3				3
1881	14	2	1			3
1882	15		6			6
1883	16	3	4			7
1884	17	2	3			5
1885	18	5				5
1886	19	1	1		1	3
1887	20	5				5
1888	21	1				1
1889	22	1	1			2
1890	23	2			1	3
1891	24	2	1			3
1892	25	2				2
1893	26	5	1		1	7
1894	27	3	2			5
1895	28	31	1	1	7	40
1896	29	3	3			6
1897	30	3	1		5	9
1898	31	3	2		1	6
1899	32	1				1
1900	33	1	2			3
1902	35		2			2
1903	36	7	4	4	2	17
1904	37		1			1
1907	40	2			1	3
1908	41	2		1	2	5
1909	42	2				2
1910	43	3		1		4
1911	44	3	1			4
1912	45	2	1		1	4
1868-1912	不明	1		3	1	5

注1) 京都出版史編集委員会編『京都出版史』京都出版史刊行会、1991、および京都府立総合資料館『京都府資料目録』京都府立総合資料館、1984を基に作成した。明治7（1874）年、明治8（1875）年、明治34（1901）年、明治38（1905）年、明治39（1906）年は該当書籍の刊行が認められないため本表から省いた。

注2) ①は案内記類、②は地誌類、③は写真帖、④はその他の書籍を示している。表中の空欄は該当書籍が無いことを示している。

が刊行された明治10(1877)年は、神戸ー京都間の鉄道が開通し、七条停車場(ステーション)(現:京都駅)が開設された年である。次に、計40冊と最多の書籍が刊行された明治28(1895)年は、第4回内国勸業博覧会、平安遷都千百年記念祭の年であり、博覧会開催期間中の総入場者数は113万人を数えている⁴²⁾。これに合わせたの平安神宮建造や時代祭の開始は周知の通りである⁴³⁾。そして、計17冊が刊行された明治36(1903)年は、京都市記念動物園(現:京都市動物園)が開園し、翌年3月に京都鉄道の二条駅が竣工、翌月には岡崎公園が開園している。刊行数の多さはこれらに合わせたものとも推察される。

明治期におけるこの種の刊行動向とその特徴は、鉄道の敷設が計画された時期であり、その開通時に合わせて多くの書籍が刊行されている他、博覧会や記念祭といった大規模なイベントが企画・開催された時期でもある。また、寺社の法要やご開帳、これまでには無かった新しい場所(例えば、動物園など)が一般民衆に解放されるなどして注目を集め、多くの観光客が見込まれる時に、盛んに企画(編纂)・刊行されていることがわかる。ことに、地理的知識を取り扱う書籍のうち、名所や名勝といった訪れる対象となる場所の知識や情報に特化している「名所案内記」や、買い物や飲食に便の良い商工案内に関するものが盛んに刊行されているようである。

また、表1からは、明治期において地誌が継続的に刊行されることがわかる。これは、近世にはみられなかった特徴の一つである⁴⁴⁾。ことに、明治9(1876)年から10年代半ばには地誌の刊行が盛んであることがよみとれる。紙幅が限られているため、地誌の刊行をめぐる詳細な検証については別稿とし、ここでは概観に留めたい。この時期、『京都府管内地理問答』など地理教育に関する問題集⁴⁵⁾や、「京都府管内」を表題に冠した地誌が多いわけだが、この社会的背景の一つには、明

治9年の京都府管轄領域の確定が関係しているよう。

今一つには、先述したように中央官庁によって明治初頭に開始された国家政策としての『皇国地誌』編纂との関係があらう。明治14(1881)年に京都府に設置された調査掛編輯部の職員で編集担当の一人であった水茎玉菜⁴⁶⁾が、明治17(1884)年に大黒屋から『山城地理誌』を刊行していることは、明治期の地理的知識をめぐる書籍の編纂とその出版動向を検証するうえで大変興味深い。また、このような京都府の管轄領域確定とそれに伴う地誌編纂事業⁴⁷⁾や皇国地誌の編纂という行政主導の編纂事業と、京都における民間レベルでの地誌出版が盛んに行われる時期が一致することは注視すべきことであろう⁴⁸⁾。

次に、明治期に刊行された書籍の体裁に関する特徴は以下の通りである⁴⁹⁾。まず、明治初期から中期あたりまでのものには、例えば、近世後期に刊行された『都名所図会』のような、近世に多くみられた「半紙本」(天地約24cm×左右約16~17cm)は少ないようである。明治期の刊行物は、近世では「中本」(約19cm×約13cm)や、「小本」(約17cm×約12cm)と分類されるものが多いといえる⁵⁰⁾。もしくは、「懷中本」や「袖中本」と称される旅先での利便性の良い小型のものが多く、1冊で完結され、頁数(丁数)の少ないものが目立つ。管見の限りで最小の案内記は、明治13(1880)年に刊行された川勝徳次郎『花洛名所独案内記』⁵¹⁾(5.2cm×12.5cm, 41丁)であった。これについては次章で詳しく扱うこととしたい。

しかし、小型の体裁で刊行されたものが多いのは、明治期以降の特徴であるとは言いきれない。というのも、小型の体裁での編纂は山近博義が指摘するように、例えば池田東籬^{とうり}の作品など、幕末の京で刊行された名所案内記にも共通する特徴の一つである⁵²⁾。明治中頃までに刊行された小型の案内記類や地誌に

表2 明治10年代の京都において刊行された名所案内記の一覧

西暦	明治	書名	編者	発行元	体裁(cm)	頁数
1877	10	京都名所巡覧記	福富正水	村上勘兵衛	12×17	80丁
1880	13	花洛名所独案内記	川勝徳次郎	川勝徳次郎	5.2×12.5	41丁
		京都名勝一覧図会	橋本澄月	風月堂	12×17	63丁
		京都名所道案内	岡本光憲	山田久	7×16	27丁
1881	14	京都名所案内図会	遠藤茂平	正宝堂	9×13・2冊	—
1883	16	三府名所独案内図会	馬場文英	細川開益堂	9×13・4冊	167丁
1884	17	京都名所めぐり	石田才次郎	石田才次郎	9×13	91丁
		今世京羽二重	石田静次郎	石田有年	6×13	72丁
1885	18	京都名所独案内	樺井達之輔	風月庄左衛門	—	1折
		開化絵入京都見物独案内	文字富之助	片岡賢三	8×16	33丁
1886	19	平安名所案内	舟橋治平	舟橋治平	6×13	72丁

注 京都出版史編集委員会編『京都出版史』京都出版史刊行会、1991、および京都府立総合資料館編『京都府資料目録』京都府立総合資料館、1984を基に作成した。

関しては、幕末以来の一種の慣習ともいえる所作に基づいて編纂されたものとみるべきであろう。つまり、これらの書籍の刊行動向とその特徴は、幕末の延長線上にそのまま位置づけられるだろう。

(2) 分析の対象

表2は、明治10年代の京都で刊行された名所案内記の一覧である。書名や内容について精査すると、少なくとも計11冊の刊行が確認できる。本稿では、先述のように『開化絵入京都見物独案内』、『花洛名所独案内記』、『京都名勝一覧図会』という3冊の案内記をとりあげ、刊行の状況などの基本的な情報を整理していく。この3冊の名所案内記を分析対象とするのは以下の理由からである。

野間が指摘するように、『開化絵入京都見物独案内』が刊行された明治18(1885)年は、琵琶湖疎水工事が着工された年であり、京都が近代化への道を歩む新しい息吹を伴った雰囲気をもった時期である⁵³⁾。明治の新名所が取りあげられている本書は、明治前期の京都を考察するにあたり有益な資料であることは先述の通りである。また本書は、明治16

(1883)年に刊行され、商工物案内としては初めて詳細な挿絵が付けられた石田有年^{いしだありとし}による『都の魁』とともに、この時期の京都を代表する案内記として評価されている⁵⁴⁾。その内容は、近世的な要素のなかに近代的な新しい要素が色濃く反映されていることがわかり、近世との連続性や叙述内容の変化を考察するにあたって格好の資料といえよう。

次に、『花洛名所独案内記』は、管見の限りでは最も小型サイズの名所案内記であり、挿絵も確認できる。京都府立総合資料館所蔵のものは、明治24(1891)年の再版が確認でき、本書の需要が高かったことが確認できる。幕末以来の特徴である小型の名所案内記として編纂された本書は、高木の指摘について考察するにあたり有益な資料の一つといえよう。

『京都名勝一覧図会』は、近世の代表的な名所案内記である『都名所図会』を強く意識しており、同書に付けられた凡例から当時の需要に合うような明治版の『都名所図会』の編纂を目指したことが推察できる。このことは、『都名所図会』が刊行から100年程経過した明治期においても強い影響力を有していた

といえる一方で、本書が明治期の叙述内容に対する近世との連続性を考えるうえで大変興味深い資料となりえることを示していよう。

各書籍の分析方法については以下のように進めていく。

まず、編纂や刊行の目的に関する記述を見だし、その意図について考察する。次いで、取りあげられた場所について、その叙述内容や掲載されている挿絵から特徴を明らかにしていく。さらに、そこに取りあげられている場所や挿絵について、編者が名所として取りあげた理由（注目すべき事象や、伝承する場所の物語といったもの）を明らかにする。そこで取りあげられている場所について、記述内容や描かれる風景を精査し、そこで語られる由緒や場所の物語について、「寺社」、「古跡」、「祭礼・風俗」、「商業・店舗」⁵⁵⁾、「産業・工業」⁵⁶⁾、「交通」⁵⁷⁾、「その他」という7つに分類し、そこに含まれる項目数と全体に占める割合を求めた。

各名所で語られる時期について、古代から江戸時代までの物語や事象に関するものと判断できるもの場合は「前近代」、明治維新以降に由来する場所の物語や事象に重きを置いていると判断できるものを「近代」と区分する。また、場所の叙述内容のなかに、前近代と近代の叙述の両方がみられる場合では、そこに取りあげられている割合が高いと判断できる方に区分した。

次章では、上記の検証方法にしたがって、それぞれの名所案内記の特徴と、そこで紹介される京名所の特徴や様態について考察する。

Ⅲ. 明治10年代の名所案内記の特徴

(1) 『開化絵入京都見物独案内』について

『開化絵入京都見物独案内』⁵⁸⁾は、文字富之助が編纂し、明治18(1885)年に片岡賢三によって刊行された名所案内記である。本書の体裁は、天地8cm×左右16cm、全33丁からなり、近世の分類で考えた場合、懐中本や袖

中本といった小型の案内記に分類できよう。本書の挿絵は銅版画で計38図が確認でき、表題に「絵入」とあるように「開化期の新名所」を中心として挿絵を強調するものとなっている。

裏表紙に書かれている本書の出版に関する情報を整理する。これをみると、「明治十七年十二月五日出版御届 同十八年三月出版 販売十六銭」⁵⁹⁾とある。これに続いて、編纂者の文字富之助、出版人の片岡賢三の氏名と所在地（住所）が、次に発売所が示されている。ここには、京都の発売所であった5名の主人の名と所在地の後に、大阪での1ヶ所、東京での1ヶ所、さらに「組合刊行大発売所 長寿堂」が紹介されている。この計8ヶ所が、本書を16銭で発売していたことがわかる。次に、以下の引用文から編者の刊行意図が読み取れる。

「京都名所社寺古跡著述の数多ありと雖
えども、此如き一小冊に尽くすへきに
あらず。只大冊の懷宝に便ならざるを厭
い、茲に其大略を抄記するのみ。 明治
庚申の二月 編者」⁶⁰⁾

ここに示されている「明治庚申の二月」とは、明治13(1880)年を指し、京都には名所や寺社、古跡に関する著述が数多くあるが、小冊の案内記では書き尽くせず、大冊では不便であり、懷中に便の良い小冊の体裁にするにあたり大略抄記で編纂した意図が読み取れる。

次に、この小冊の名所案内記に立項される場所の叙述内容の傾向と特徴、そして、本書が編纂された時期について考察していく。本書には、まず「京都見物独案内方位図」と題された都市図が掲載され、次いで「三条大橋ヨリ凡道添付」と題された目録が付けられている。本書における名所の紹介は、起点となっている「三条大橋」の挿絵と叙述（解

表3 『開化絵入京都見物独案内』に立項されている場所とその行程

行程
[1]三條大橋(●)→[2]新京極通→[3]御所(●)→[4]仙洞御旧院(*1)[5]大宮御旧院博覧会(*2)→[6]相国寺(*3)→[7]上御霊社→[8]下加茂社(●)→[9]山はな一料理屋平八→[10]下御茶屋→[11]修学院上御茶屋(*4)→[12]寂光院→[13]証拠阿弥陀(勝林寺)→[14]北岩倉-大雲寺→[15]鞍馬寺→[16]貴布弥社→[17]上加茂神社(●)→[18]今宮社→[19]大徳寺→[20]建勲神社*→[21]金閣寺(●)→[22]平野神社→[23]北野神社(●)→[24]等持院→[25]竜安寺→[26]御室(●)→[27]妙心寺(●)→[28]高雄山(神護寺)→[29]護王神社→[30]月輪寺→[31]愛宕山→[32]釈迦堂清涼寺→[33]天竜寺→[34]嵐山(●)→[35]法輪寺→[36]松尾神社→[37]月読社→[37]梅ノ宮神社(●)→[38]桂川ノ鉄橋[39]大原野神社[40]花ノ寺-勝持寺→[41]西岩倉-金蔵寺→[42]三鈷寺[43]粟生光明寺[44]善峯寺[45]柳谷[46]向日神社[47]長岡天満宮[48]宝寺-宝積寺→[49]天王山[50]離宮八幡社[51]山崎ステーション→[52]男山神社→[53]伏見駅[54]桃山[55]宇治平等院[56]興聖寺[57]三室戸寺[58]黄檗山[59]日野薬師[60]醍醐寺[61]勧修寺[62]花山元慶寺[63]御香宮[64]藤の森社(●)[65]稻荷神社(●)→[66]東福寺→[67]泉涌寺→[68]新熊野観音→[69]三十三間堂(●)→[70]豊国神社* [71]大仏方広寺(●)[72]耳塚(●)[73]歌中山清閑寺[74]西大谷(●)→[75]清水寺(●)→[76]八坂塔-宝観寺→[77]霊鷲山-正法寺→[78]双林寺→[79]東大谷→[80]長楽寺→[81]円山→[82]知恩院(●)→[83]八坂の神社(●)→[84]南禅寺→[85]永観堂→[86]黒谷-金戒光明寺(●)→[87]真如堂→[88]吉田社(●)→[89]銀閣寺(●)→[90]詩仙堂→[91]百万遍[92]療病院*→[93]舎密局(●)→[94]織工場(●)→[95]勧業場(●)→[96]革堂→[97]下御霊社→[98]中学校→[99]二条御城京都府(●)→[100]本願寺(●)→[101]大教講堂(●)→[102]停車場-ステーション(●)→[103]東本願寺(●)→[104]六角堂(●)→[105]四条鉄橋(●)[106]建仁寺→[107]六波羅蜜寺→[108]安井金比羅

注1) 表中の(●)は挿絵がみられる項目を示し、→は項目の最後に次の名所への行程(距離)が記載されている場所を示している。

注2) 立項されている名所の内容と挿絵に差異がみられる場所は、(*)として示している。なお、ここに掲載されている挿絵には、次の標題が付けられていた。(*1)仙洞御庭(*2)大宮御所(*3)東征戦亡之碑文(*4)修学院離宮。また、健勲神社・豊国神社・療病院に示した*は、建設中であることを示している。

説)に始まり、ここには計108ヶ所の名所が取りあげられている。

本書で立項されている名所の多くは、叙述の最後に「〇〇へ〇丁(里)」というように、次の場所までの距離が示されており、名所廻りのルート(行程)がある程度意識された構成となっているようである(表3)。その行程は、起点の三条大橋から概ね一筆書きで反時計回りに設定されていることがわかる。これは、山近⁶¹⁾が指摘するように、幕末に刊行された池田東籬の名所案内記にみられる行程の特徴とほぼ一致するものといえる。

名所とされる理由(場所の物語や挿絵の特徴)について考察するにあたり、前章2節で先述したように、叙述内容を7つに分類したものが表4である。これをみると、前近代の記述によっている場所は、本文で89ヶ所(82.4%)、挿絵では26図(68.4%)を確認でき

る。

ここにあげられている場所、描かれている場所のほとんどが寺社であった。この寺社が占める割合は、『都名所図会』や池田東籬の作品群など近世以来のものと変わらない⁶²⁾。また、表3をみると、近世の名所案内記には必ず掲載されていた「島原」などの代表的な

表4 『開化絵入京都見物独案内』で紹介されている項目における記述内容の分類

	時期	総数	A	B	C	D	E	F	G
挿絵	前近代	26	22	2	0	0	0	1	1
	近代	12	1	4	0	0	3	2	2
本文	前近代	89	82	4	0	1	0	1	1
	近代	19	3	4	0	1	4	4	3

注1) 前近代と近代の境界は、明治維新とする。

注2) 表中のアルファベットは、(A)寺社、(B)古跡、(C)祭礼・風俗、(D)商業・店舗、(E)産業・工業、(F)交通、(G)その他を示している。

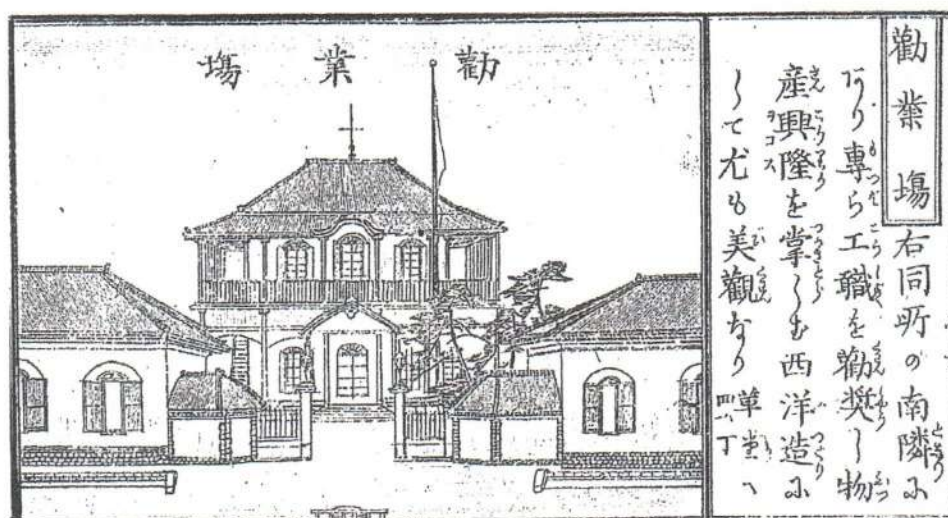


図1 『開化絵入京都見物独案内』に掲載されている勸業場

出典) 文字富之助編『開化絵入京都見物独案内』片岡賢三、明治18(1885)年刊、28頁、京都府立総合資料館所蔵。

京都の風俗や、「祇園会」といった祭礼は、まったく取りあげられていない。そして、有名な茶屋や西陣といった伝統産業についても触れられていない。ここで唯一取りあげられている修学院村の「山ばな」(平八茶屋)を除き、名所案内記に祭礼や風俗、商業、工業に関する場所の立項や叙述がみられないのは大変興味深い特徴であるといえよう。

転じて、本書は「開化」と題されるように、明治以降に創られた「新名所」が取りあげられていることは先述の通りである。また、近世から名所として名所案内記に取りあげられてきた場所の中には、明治維新以降に起こった物語や事象によって名所として認識されているものと、近世的な叙述の中に近代の事象が新たに加筆されている箇所がみられる。本書では、これらを合わせて本文で19ヶ所、挿絵で12図を確認できる。そこで次に、これらの特徴について考察していく。

表3のうち明治期に新たに創られた場所は、例えば、「新京極通」(2)⁶³⁾や「建勲神社」(20)などをはじめとする計13ヶ所が確認できる。ここでは、明治10年代に府知事榎村正直が主導した「近代(西洋)的な工場」の他に、中

学校や本願寺の大教講堂(現:龍谷大学)といった「煉瓦造りの学校」、そして、山崎ステーションや七条停車場(現:京都駅)や、桂川や四条の「鉄橋」といった鉄道に関する場所が名所として紹介されている。つまり、この「新名所」とは、一つには、開化や近代化のシンボルとしての場所であったといえよう。また、織田信長を主祭神として新造された「建勲神社」(明治13年9月奉迎)、豊臣秀吉を祀った「豊国神社」(同5月竣工)が建造中ながら新名所に加えられており、本書の編纂時期を考えるうえでも大変興味深い。

近代に新築された「勸業場」(95)(図1)の叙述についてみてみよう。ここでは、勸業場とは工織を勸奨し、物産興隆を掌握する場所であると解説している。そして、挿絵にもあるように「西洋造りにして尤も美観なり」という建物の外観の様子が示されている。この「尤も美観」という表現は、「頗る美観」(中学校、停車場など)や、「壮麗」(四条鉄橋)など、明治前期に建造された西洋造りの建造物に共通する表現の一つであった。対して、前近代から立項されている場所では、例えば「相国寺」(6)(図2)に、「(前略)禅宗



図2 『開化絵入京都見物独案内』に掲載されている相国寺

出典) 文字富之助編『開化絵入京都見物独案内』片岡賢三, 明治18 (1885) 年刊, 4 頁, 京都府立総合資料館所蔵。

の本山にて境内美景なり…⁶⁴⁾とあるような、極まれに庭園の様子などに限って用いられた事例を除くと、ほとんどみられない表現であったといえる。つまり、この「頗る美観」というような強調した美的表現は、近代建築に優先的に与えられた表現方法と考えることができる。

続いて、近世から名所として立項されてきた場所ながら、その叙述内容が近代以降の事象に変更、もしくは、それが加筆されている場所について検討する。ここには、「御所」(3) や「相国寺」(6) など計 6 ヶ所が確認できる。「相国寺」(6) (図 2) の事例では、近世の名所案内記に多くみられた開基や寺歴についてではなく、寺中にある明治元 (1868) 年の鳥羽伏見の戦いによる戦死者の墳墓と、西郷吉之助が作らせた碑文という、明治維新以降の事象で紹介されている。挿絵についても、これまでの相国寺の境内の様子といったものではなく「東征戦亡之碑」となっている。この背景の一つには、西郷吉之助が維新創業の元勲として有名であり、幕末には相国寺が薩摩藩の藩邸とされたことに関係することは想像に難くないだろう。

この他に、大宮御所の解説では、博覧会会

場として利用されているという記述に変更され、二条城では、離宮となった後に、京都府の庁舎として転用されていることが加筆され、伏見駅では鎮台に関する記述が加筆されている。また、「御所」(3) は、近世後期にはすでに名所化されていたが⁶⁵⁾、本書では御苑として整備された後の叙述となっていることがわかる。

挿絵に描かれる名所空間とその視点の関係をみると、例えば、『都名所図会』にあったような全景を客観的に俯瞰する構図とも⁶⁶⁾、あるいは、19 世紀初めの『都百景』に代表される、誇張された浮世絵の構図とも異なっている。むしろ、図 1 からわかるように、本書の挿絵は、風景写真に近い特徴をみいだせる。この風景写真との構図の類似性については、当時既に刊行済みであったとされる『京都名所撮影』という写真帖に注目してみたい⁶⁷⁾。これは、明治前期に京都の桑田清新堂から発売されたと考えられており⁶⁸⁾、日本語での表題の他に、「JAPAN KIYOTOMEISHO PHOTOGRAPHER」という英語表記があることから、外国人用の土産物として発売されたものであろう。この写真帖と『開化絵入京都見物独案内』に掲載されている挿絵を比較し

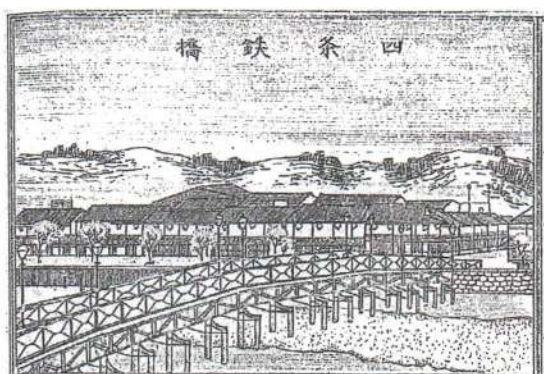


図3 『開化絵入京都見物独案内』に掲載されている「四条鉄橋」

出典) 文字富之助編『開化絵入京都見物独案内』片岡賢三、明治18(1885)年刊、32頁、京都府立総合資料館所蔵。



図4 『京都名所撮影』に掲載されている「四条鉄橋ヨリ東山」

出典) 『京都名所撮影』桑名清新堂、発行年不明、国際日本文化研究センター所蔵(京都名所撮影データベース) <http://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/satsuei/c-pg8.html> (最終閲覧日2012年8月19日)

た場合、写真帖に掲載されている場所は、「新京極」を除くと、本書において挿絵が掲載されている場所と一致する。その構図は、例えば「四条鉄橋」(105)(図3、図4)のように、構図が左右反転となっているものも確認できるが、対象とする景物や場所、その構図の方位や視点などに共通する特徴が実に多くある。

最後に、本書が編纂された時期について考

察する。跋文の年記は明治13(1880)年であり、刊行される数年前には編纂を始めていたようである。本書に取りあげられている場所の叙述内容を確認していくと、例えば「本願寺」の項目に示される大教講堂の記述に、「(前略)又門前に新築大教講堂あり 西洋造りにして頗る美なり 明治十二年五月三日開業式 此日数万観人群集す」⁶⁹⁾とあり、この明治12(1879)年5月という年記が、本書の刊行年に最も近いものであった。明治10(1877)年に建築が始まった建勲神社と、豊国神社は明治13年に落成しているが、本書では竣工間近という記述になっている。また、舎密局は、明治14(1881)年に北垣国道によって民間に払い下げられており、明治17(1884)年には別の用途に変わっている⁷⁰⁾。本書では、払い下げ以前の様子で立項されていることから、編纂がそれ以前に行われたものと推測できる。そして、前述した写真帖は明治13年の時点で手にいれることが可能であり、編者が目にしたことも十分にあり得る。したがって、本書に示されている京都の様相とその編纂時期は、明治10年から12年後半あたりまでの事象や景物ということなり、本書の編纂はこの頃に行われた可能性を指摘できよう⁷¹⁾。

(2)『花洛名所独案内記』について

『花洛名所独案内記』⁷²⁾は、川勝徳次郎が編纂、明治13(1880)年に刊行した名所案内記である。京都府立総合資料館所蔵本の奥書には、「明治十三年七月 出版御届 同年同月 彫成発行 明治二十四年再版」⁷³⁾とあり、初版刊行時には未開通であった、東京―神戸間など主要な汽車の発着時刻表⁷⁴⁾が最後尾に追加されている。

初版の体裁は、天地が5.2cm×左右12.5cm、全41丁と小型であり、懐中を意識したものとなっている。再版である本書には、序文や凡例は付されておらず、表紙を開くと、「三條大橋ヨリ諸方道法附」と題された目録が付

表5 『花洛名所独案内記』に立項されている場所とその行程

行程	
[1]三條大橋(●)→[2]新京極→[3]御所(●)[4]仙洞御旧院[5]大宮旧御所博覧会→[6]相国寺→[7]上御霊→[8]下鴨(●)→[9]山ばな→[10]下御茶や→[11]同上-修学院上茶屋-(●)→[12]寂光院→[13]証コ阿弥陀→[14]北岩倉→[15]鞍馬→[16]貴布祢社[17]上賀茂神社(●)→[18]今宮社→[19]大徳寺(●)→[20]建勲神社*→[21]金閣寺(●)→[22]平野神社(●)→[23]北野神社(●)→[24]等持院→[25]龍安寺→[26]御室(●)→[27]妙心寺→[28]高雄山(●)→[29]護王神社[30]梅尾山→[31]槇尾山→[32]月輪寺→[33]愛宕神社(●)→[34]釈迦堂清涼寺→[35]天龍寺[36]嵐山(●)→[37]法輪寺→[38]松尾神社(●)→[39]月読社→[40]梅ノ宮→[41]紙すきば→[42]桂川ノ鉄橋[43]大原野神社[44]花ノ寺[45]西岩倉[46]三鈷寺[47]粟生光明寺[48]善峯寺[49]柳谷[50]向日神社[51]長岡天満宮(●)[52]宝寺[53]天王山[54]離宮八幡社[55]山崎ステーション→[56]男山神社→[57]伏見駅[58]桃山[59]宇治平等院(●)[60]興聖寺[61]三室戸寺[62]黄檗山(●)[63]日野葉師[64]醍醐寺[65]三宝院[66]勸修寺[67]花山元応寺[68]御香宮[69]藤の森社(●)[70]伏見稻荷社(●)→[71]東福寺→[72]泉涌寺→[73]新熊野観音→[74]三十三間堂(●)→[75]豊国神社* [76]大仏方広寺[77]耳塚(●)[78]歌山清閑寺→[79]西大谷→[80]清水寺(●)→[81]八坂の塔→[82]霊鷲山→[83]高台寺→[84]双林寺→[85]東大谷→[86]長楽寺→[87]丸山→[88]智恩院(●)→[89]八坂ノ神社(●)→[90]南禅寺→[91]永観堂→[92]若王子神社→[93]黒谷(●)→[94]真如堂→[95]吉田社→[96]銀閣寺(●)→[97]詩仙堂→[98]百万遍[99]療病院*→[100]舎密局(●)→[101]織工場→[102]勸業場(●)→[103]草堂→[104]下御霊→[105]中学校(●)→[106]二条城京都府(●)→[107]島原郭→[108]東寺→[109]本願寺(●)→[110]大教講堂→[111]停車場(●)→[112]東本願寺(●)→[113]六角堂(●)→[114]誓願寺→[115]四条鉄橋(●)→[116]建仁寺→[117]六波羅蜜寺→[118](安井金比羅?)	

注1) 表中の(●)は挿絵の挿入がみられる項目を指し、→は項目の最後に次の名所への行程(距離)が記載されている場所を示している。また、建勲神社・豊国神社・療病院の*は、建設中であることを示している。

注2) 安井金比羅は、総目録には記載されているが本文中ではみられないため、ここでは(?)と示した。

られており、ここには本書に立項されている計107ヶ所の名称と、起点である三条大橋からの距離が示されている。本文では、「三条大橋」についての解説とその挿絵の掲載に始まり、本書を通じて計118ヶ所の立項と、計31図の銅版画と推測される挿絵を確認できる⁷⁵⁾(表5)。前節の、『開化絵入京都見物独案内』と同様、『花洛名所独案内記』に紹介される場所の多くは、まず所在地が示され、次に由緒や歴史、もしくは注目すべき事象が記述されている。そして、最後に次の項目までの距離が示されており、名所廻りの行程がある程度意識された構成となっている。

本書において名所として取りあげられる理由(場所の物語や挿絵の特徴)について考察するにあたり、前章2節で述べたように、紹介されている項目で語られている内容とその時期について7つに分類したものが表6である。これによると、前近代の記述によって名所として立項されている場所は、本文では計

95ヶ所(80.5%)、挿絵では計24図(77.4%)を確認できる。本書では、近世において「京都らしさ」を表象していた祭礼や風俗といった事象や景物に関する場所は「島原郭」(107)⁷⁶⁾のみである。ここでは、寛永18(1641)年に遊里が柳馬場から移転したことと、吉例となっていた3月21日の菜種の道中と称されていた太夫による郭の練り歩きについての記述がみられる。太夫の行列は実に美観であった

表6 『花洛名所独案内記』で紹介されている項目における記述内容の分類

	時期	総数	A	B	C	D	E	F	G
挿絵	前近代	24	20	2	0	0	0	1	1
	近代	7	0	2	0	0	1	2	2
本文	前近代	95	88	4	1	1	0	1	0
	近代	23	6	4	0	1	4	5	3

注1) 前近代と近代の境界は、明治維新とする。

注2) 表中のアルファベットは、(A)寺社、(B)古跡、(C)祭礼・風俗、(D)商業・店舗、(E)産業・工業、(F)交通、(G)その他を示している。



図5 『花洛名所独案内記』に掲載されている療病院

出典) 川勝徳次郎『花洛名所独案内記』明治24(1891)年
(初版 明治13(1880)年刊), 34頁, 京都府立総合資料館所蔵

ことを懐古し、^{いまはつきひさだまさる}「當月日不定なり」とその現状が付け加えられている。

そして本書において、大店やその他の商業、伝統産業に関する記述がみられる場所は、「山ばな」(9)のみとあってよい。これは、茶屋平八の名物である麦飯とろろ汁と、高野川で捕れる川魚について記述したもので、『開化絵入京都見物独案内』と共通している。つまり、本書でも、前近代の事象に由来する場所の大半は寺社であり、近世以来の伝統的な京都の祭礼や風俗、商業や伝統産業に関する場所や景物は、ほとんど取りあげられていない。

次に、近代の事象に由来する名所について考察していく。これに該当する場所は本文では計23ヶ所(19.5%)、挿絵で計7図(22.6%)を確認できる。このうち、明治期に創出された場所は、例えば「新京極」(2)、「建勲神社」(20)など計13ヶ所を確認でき、なかでも「建勲神社」、「豊国神社」(75)、「療病院」(99)(図3)については、本書編纂時にはまだ建築中であったことがわかる。前節の事例もそうであったように、近世では編纂時代に建築中であった場所が名所案内記に名所として取りあげられた事例は、管見の限りではなかったことであり、明治期における新しい特徴の

一つであるといえよう。

これらのうち「療病院」(図5)を事例として叙述内容をみてみよう。ここでは、まず建設中の所在地が示され、「西洋造りで美観」という名所としての理由が述べられている。また、「四条鉄橋」(115)(図6)では、「都て鉄造二して橋上二紅白硝子燈を立」とあるように、何が壮麗であるのかがより詳しく示されている。このように本書においても、明治以降に創られた場所の多くが、「美観」、「壮麗」などの表現で語られていることは大変興味深い。

記述内容が近代の事象に変更、もしくは加筆された場所は、「御所」(3)や「相国寺」(6)など計9ヶ所が確認できる。例えば、「霊鷲山」(82)では、寺の開基と阿国上人所縁の愛宕興正寺廟の新築について述べた後に、勤王戦死者の招魂墓があることが追記されていた。また、「誓願寺」(114)では、同じく寺の開基と什物について述べられた後に、割字で新京極通の話題にふれている。そして、本書に取りあげられている京都の様相とその編纂時期については、本願寺や療病院などの叙述から、明治10年後半から12年後半頃までの景物が中心となっており、その編纂時期は先述したように、取りあげられている京都の景物

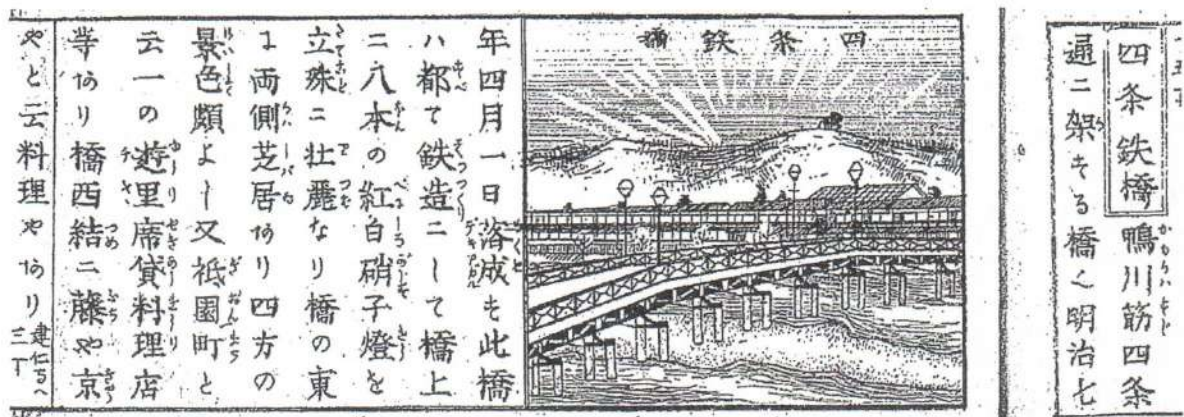


図6 『花洛名所独案内記』に掲載されている四条鉄橋

出典) 川勝徳次郎『花洛名所独案内記』明治24(1891)年
(初版 明治13(1880)年刊), 40-41頁, 京都府立総合資料館所蔵

と刊行年に数年のひらきが認められる『開化絵入京都見物独案内』とは異なり、本書は編纂してまもなく刊行されたことが指摘できよう。

最後に、本書では、次の名所までの行程(「道法」)が示されていることは先述の通りである。しかし、京都御苑内など、次の場所が同じ敷地の場合などでは行程はみられない。また、「大原野神社」(43)から「山崎ステーション」(55)までの地域と、「伏見駅」(57)から「伏見稲荷神社」(70)までの地域では、ある程度の規則的な配置は推測できるが次の行程が明確にはなっていない。その背景の一つとしては、「山崎ステーション」と「伏見駅」の叙述に宿が多いことが述べられていることから、編者は京都郊外の外泊を必要とする場所では、交通の便が良くその地域の起点となりえる場所を提示するに留め、利用する旅人個人の興味関心によって選択的に名所廻りをできるような編纂を行った可能性がある」と指摘できるのではないだろうか。しかし、これらに対する明確な回答については今後の成果をまちたい。

(3) 『京都名勝一覧図会』について

『京都名勝一覧図会』は⁷⁷⁾、橋本澄月が編

纂し、明治13(1880)年に風月堂から刊行された名所案内記で、天地12cm×左右17cm、全63丁の小型の体裁となっている。ここに掲載された地図や挿絵の一部には彩色が施されており、特徴的な1冊となっている。

刊行の年記に関する情報をみると、奥書に「明治十三年七月二十三日版権御願 同八月十九日版権免許 同年十月刻成」⁷⁸⁾とある他、凡例に「明治十三年秋日」とあり、編纂後まもなく刊行されたことが推察される。編者の編纂意図は、以下の引用文にみることでできよう。

「一(前略)神社の芳境仏閣の佳色山川の美観等自今の風景を模写し旧名勝図会に基附遺漏を巡歴し幼童の輩座して古跡の勝地を見ることを肝要とす

一 文語は都名所図会の記書を種とし旧地其の委きの大意を撰書すに故其示らす」⁷⁹⁾

ここに示された「都名所図会の旧書」とは、秋里籬島編『都名所図会』を示しており、本書はこれを種本としていることがわかる。『都名所図会』の挿絵の構図に関する凡例⁸⁰⁾は本書にみられないが、それ以外では

両書の凡例の記述はほぼ一致している。表題とする『京都名勝一覧図会』も、「都名所図会」を意識したものであり、当時代の需要に合うような明治版の『都名所図会』の編纂を目指したことが本書に付けられた凡例からわかる。

本書は表7に示すように、本文中の標題によって、①から⑦までに区分され、ここに取り上げられる場所や事象は計347項目にわたり、①には計13図の地図の掲載も確認できる。そして、②以降において、「名勝」として取り上げられる場所は計233ヶ所、挿絵に描かれている場所は64ヶ所（計65図）にのぼっており、ここに示されている名勝の項目数は先の2つの案内記の2倍近い数であることがわかる。本書に掲載されている地図については、まず「京都名勝方位案内」では、市中と郊外が彩色によって区分されているほか、名称や河川などに彩色がみられた。次いで、「洛中名勝方位」では、下京の名勝が図示されている。また、「伏見市中」では、第1区から第4区までの区画毎に塗り分けられている。そして、京都の郊外をほぼ一周する形で描かれている絵地図である「泉涌寺より藤森至之図」を始めとする計10図では、近世に刊行された京都図や鳥瞰図と類似した特徴が確認できる。銅版画の挿絵には、『都名所図会』にみられるような上空高くから俯瞰する構図のものと、先述した風景写真に近い構図のものがあられ、場所の説明や強調したい事柄によって挿絵の構図を選択しているようである。掲載されている挿絵のうち彩色がされているものについては、例えば、桜の木に彩色することで桜の名所であることを明示するなど、その季節を表現するほか、電灯に色を付けることによって夜の風景を表すなど、見るべき時期と時間を表しているといえよう。

本文中で紹介されている場所の中には、例えば「三条大橋」(1)⁸¹⁾や「誓願寺」(3)などにみられるように、注目すべき記事や伝承

される景物について実に詳細に叙述しているものがある。また、例えば「五条大橋」(15)や「四条演劇」(29)などのように、『都名所図会』にみられた、項目の中に小項目があげられている場所があるほかに、所在のみの簡素な記述に留められた場所もみられる。このように本書では、先述した2つの名所案内記とは異なり次の場所への行程は示されていないが、場所の叙述は実に多様である。

ここに名所として取り上げられる理由（場所の物語や挿絵の特徴）について考察するにあたり、前章2節で述べたように、そこで語られている内容と時期について7つに分類したのが表8である。これによると、前近代の記述によって立項されている場所は本文で計186ヶ所（79.5%）、挿絵で計37図（61.7%）である。挿絵には、「島原遊里」(213)や、「八坂神社並二山鉾の図」(30：計2図)という伝統的な祭礼・風俗が示されている点は、前述の2つの名所案内記にはない傾向であった。しかし、本文中に示される場所の叙述についてみた場合、そこでは寺社に関するものが大半を占めており、例えば祇園会の挿絵にはあるものの、独立した記述はみられないなど、祭礼や風俗、商業や伝統的な産業に関する場所はほとんどみられない点では、先述した2つの名所案内記と共通している。

次に、近代の事象に由来する名所について考察していく。これに該当する場所は本文で計48ヶ所（20.5%）、挿絵で計23図（20.5%）を確認できる。表7のうち、明治期に新設された場所は、「新京極通」(2)や「各宗公試験場」(12)など計44ヶ所が確認でき、ここに示されている項目の多くは、明治以降の新しい産業や工業に関するものであった。また、先述した2つの名所案内記にはみられなかった「盲亜院」(199)や「牢獄」(210)といった公の施設、「師範学校」(196)、「両本願寺火葬場」(54)（図7）など、表8ではその他に分類される場所にも注目される。ことに、

表7 『京都名勝一覧図会』に立項されている場所とその行程

行程	
①	目録 内裏の図(●) 京都名勝方位案内(○) 伏見市中(○) 洛中名勝方角(○) 泉涌寺より藤森至之図(○) 大仏より西大谷並清閑寺に至ル(○) 祇園社より知恩院清水寺至(○) 三條大橋より知恩院より白川山無動寺道(○) 下加茂より大非山至(○) 是より北西山に至る(○) 西山之部(○) 是より南山城より東に至る長田川百丈山へ(○) 小倉池淀より伏見より高橋至(○) 宇治ヨリ山科に至道略(○) 三條大橋(●)(京都沿革)(※1) 仙洞旧院(●) 大宮旧御所(●) 二条城京都府(●) 京都裁判所(●)
②	[1]三條大橋(●) [2]新京極通(※2) [3]誓願寺 [4]誠心院 [5]長金寺 [6]西光寺 [7]蛸薬師 [8]圓福寺 [9]錦天満社 [10]金蓮寺 [11]八坂神社御旅所 [12]各宗公試験場 [13]神宮教会(●) [14]御影堂(●) [15]五条大橋(●) [16]蛭子神社 [17]摩利支天 [18]建仁寺(●) [19]愛宕寺 [20]六波羅蜜寺(●) [21]珍皇寺六道 [22]安井金比羅 [23]驅微院 [24]点灯局 [25]歌舞練場 [26]女紅場(※3) [27]製茶場 [28]四条鉄橋(※4) [29]四条演劇 [30]八坂神社並に山鉾ノ図(●●) [31]相撲場 [32]知恩院(●) [33]丸山(●) [34]鑛泉 [35]長楽寺 [36]將軍塚 [37]東大谷(●) [38]双林寺 [39]高台寺(●) [40]秋葉山 [41]七観音 [42]伽羅観音堂 [43]八坂塔(●) [44]庚申堂 [45]霊鷲山正法寺 [46]三年坂 [47]興正寺大谷 [48]大日堂 [49]子安観音 [50]清水寺(●) [51]麦酒製造所 [52]吹上水 [53]清閑寺 [54]両本願寺火葬場(●) [55]小松谷 [56]三嶋社 [57]西大谷(●) [58]新日吉社 [59]阿弥陀峯 [60]智積院 [61]大仏方広寺(●) [62]豊国神社 [63]耳塚 [64]三十三間堂 [65]泉涌寺 [66]今熊観音 [67]東福寺(●) [68]稻荷神社(●) [69]宝塔寺 [70]深草瑞光寺 [71]藤の森神社
③	[72]壇王法林寺 [73]頂妙寺 [74]神道中教院 [75]粟田神社 [76]仏光寺大谷 [77]南禅禅寺(※5) [78]永観堂 [79]若王子神社 [80]光雲寺 [81]鹿ヶ谷 [82]銀閣寺 [83]黒谷 [84]真如堂 [85]吉田神社 [86]百万遍 [87]干菜寺 [88]下加茂神社(●) [89]上賀茂神社(●) [90]御苔薩池 [91]妙圓寺 [92]山花平八 [93]御影社 [94]赤山社 [95]魚山 [96]修学院 [97]同下茶屋 [98]比叡山ノ図(※6) [99]三宅八幡社 [100]大非山
④	[101]鞍馬寺 [102]貴船神社 [103]岩屋山 [104]健甕神社(※7) [105]今宮神社 [106]妙顕寺 [107]大徳寺
⑤	[108]焰魔堂 [109]北野神社(※8) [110]平野神社 [111]金閣寺 [112]等持院 [113]龍安寺 [114]妙心寺 [115]仁和寺(※9) [116]三宝寺 [117]梅尾高山寺 [118]槇尾山平等寺 [119]高雄山 [120]護王神社 [121]月輪寺(※10) [122]愛宕神社 [123]清滝川 [124]水野尾 [125]三宝寺 [126]二尊院 [127]釈迦堂(●) [128]大覚寺 [129]天龍寺(●) [130]嵐山福知山(●) [131]太秦広隆寺(●) [132]木嶋社 [133]梅の宮神社(●) [134]松尾神社(●) [135]月読社 [136]桂川鉄橋(●) [137]大枝坂 [138]大原野神社 [139]花ノ寺 [140]桂紙漉場(※11) [141]革製造所 [142]つやの社 [143]西岩倉 [144]三鈴寺 [145]善峰寺 [146]柳谷観世音 [147]粟生光明寺(●) [148]向日明神社(●) [149]長岡天満宮(●) [150]天王山(●) [151]宝寺 [152]離宮八幡宮 [153]城南神社 [154]竹田街道高橋(※12) [155]淀川渡 [156]男山神社 [157]童仙房 [158]百丈山 [159]鷲峰山(●) [160]木津渡 [161]笠置寺 [162]解満寺 [163]伏見舟場(●) [164]鉄工場 [165]巨椋湖 [166]宇治見山 [167]宇治 [168]平等院 [169]興聖寺 [170]三室戸寺 [171]黄檗山(●) [172]一言寺 [173]三宝院 [174]上醍醐寺 [175]下醍醐寺 [176]勧修寺 [177]大石屋敷 [178]日野薬師 [179]花山社 [180]花山院 [181]山科御坊 [182]牛尾山 [183]此近村社寺界 [184]日岡峠(※13)
⑥	[185]勧業場(●) [186]織工場(●) [187]本能寺 [188]妙満寺 [189]本誓寺 [190]舎密局(●) [191]女学校 [192]女紅場 [193]下御霊神社 [194]革堂行願寺(●) [195]療病院(●) [196]師範学校 [197]九条殿旧庭中 [198]宗像神社 [199]盲啞院(●) [200]中学校(●) [201]尺度製作所 [202]斗量製作所 [203]権衛製作所 [204]懲役場 [205]養蚕場 [206]授産所 [207]一条戻り橋 [208]西陣織物物産 [209]神泉社 [210]牢獄 [211]三井銀行 [212]壬生寺 [213]島原遊里(●) [214]六孫王社大通寺 [215]東寺弘法大師(●) [216]西本願寺(●) [217]大教校(●) [218]興正寺 [219]本国寺 [220]天使社 [221]管大臣社 [222]空也堂 [223]六角堂(●) [224]郵便税則の略(●) [225]電信賃金表(●) [226]種痘館 [227]相国寺(※14) [228]御所八幡社 [229]集書院(●) [230]因幡薬師(●) [231]仏光寺(●) [232]東本願寺(●) [233]停車場ステーション(●) [京都より汽車賃金表] [京都より大谷記者賃金表]
⑦	官弊社 国弊社 御陵 諸祭官 祭神部 同私祭神部

- 注1) 本書の構成は、その題号から、①(題号無し)、②三條大橋より名勝順廻記、③是より東北社寺名勝の部、④是より北西の社寺名勝の部、⑤是より西社寺名勝、⑥三條大橋より洛中社寺名勝の部、⑦(題号無し)の7つに区分されている。
- 注2) 表中に示した(●)は、その項目に挿絵が掲載されている事を示し、[130]八坂神社並に山鉾ノ図(●●)は、そこに計2図の挿絵が掲載されていることを表している。(○)は、地図が示されていることを示している。
- 注3) 本文中に示した、(*)は、立項されている場所と挿絵に差異が見られるものを示しており、以下の〔〕内は、描かれる場所を示している。(※1)は〔紫宸殿、御所庭中〕、(※2)は〔四条御旅所から三條下までの新京極通の俯瞰図〕、(※3)は〔歌舞練場、製茶場、驅微院、点灯局、祇園町ノ女紅場〕、(※4)は〔鉄橋より両演劇の図〕(※5)は〔鴨東地域の社寺の俯瞰図〕、(※6)は〔比叡山より琵琶湖望図〕、(※7)は〔鞍馬山、船岡山、建勲社、貴船、今宮社、大徳寺〕、(※8)は〔北野社、平野社、金閣〕、(※9)は〔御室、三宝寺、梅尾山、槇尾山、高雄山、護王社〕、(※10)は〔月輪寺、愛宕山、一の鳥居、清滝川、宿屋〕、(※11)は、桂川〔紙漉場、革製場〕(※12)は〔男山社、八幡、淀川、鳥羽、城南宮、高橋、男山への船渡し、童仙房〕、(※13)は〔碑文〕、(※14)は〔東征戦亡之碑写〕である。

表8 『京都名勝一覧図会』で紹介されている項目における記述内容の分類

	時期	総数	A	B	C	D	E	F	G
挿絵	前近代	37	32	0	2	0	0	1	2
	近代	23	3	0	0	0	5	4	11
本文	前近代	186	166	12	2	0	0	1	5
	近代	48	6	1	2	3	15	6	15

注1) 前近代と近代の境界は、明治維新とする。

注2) 表中のアルファベットは、(A) 寺社、(B) 古跡、(C) 祭礼・風俗、(D) 商業・店舗、(E) 産業・工業、(F) 交通、(G) その他を示している。

死者を弔う場所である火葬場が、西洋風の煉瓦造りであるために名勝の一つにあげられていることは興味深いことであり、近世の名所案内記にはみられなかった明治期の新しい特徴の一つといえよう。

本書では、「郵便税則の略」(224)(図8)など、名所の案内に留まらず実用的な情報も積極的に示されている。この点から、本書が

名所案内記として刊行されていたながら、近世の『京羽二重』や、『京羽津根』のような節用地誌の側面をもっていたことが見いだせる。このような側面は、種本とした『都名所図会』や、他の秋里籬島作品、あるいは幕末の名所案内記にはみられない特徴であるといってもよい。

次に、記述内容が近代の事象に変更、もしくは加筆された場所としては、「五条大橋」(15)や「九条殿旧庭中」(197)などが確認できる。「五条大橋」では、豊臣秀吉によって現在の位置に移された後の橋の様子が述べられ、明治11(1878)年に現在の橋に架け替えられたことが加えられている。「九条殿旧庭中」は、所在地のみで詳細は記されていないが、明らかに旧九条邸に由来するものであり、近代以降に名勝として認識された場所の一つである。

最後に、本書に取りあげられている京都の

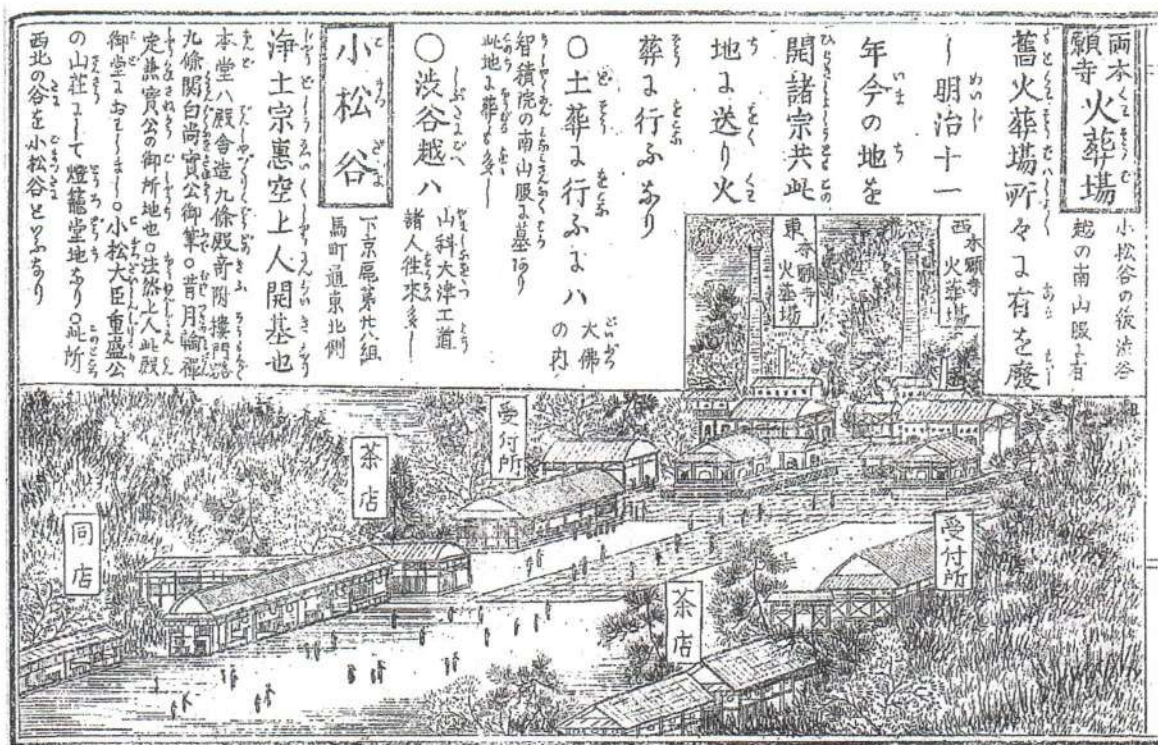


図7 『京都名勝一覧図会』に掲載されている西願寺火葬場

出典) 橋本澄月『京都名勝一覧図会』風月堂、明治13(1880)年刊、26頁、京都府立総合資料館所蔵

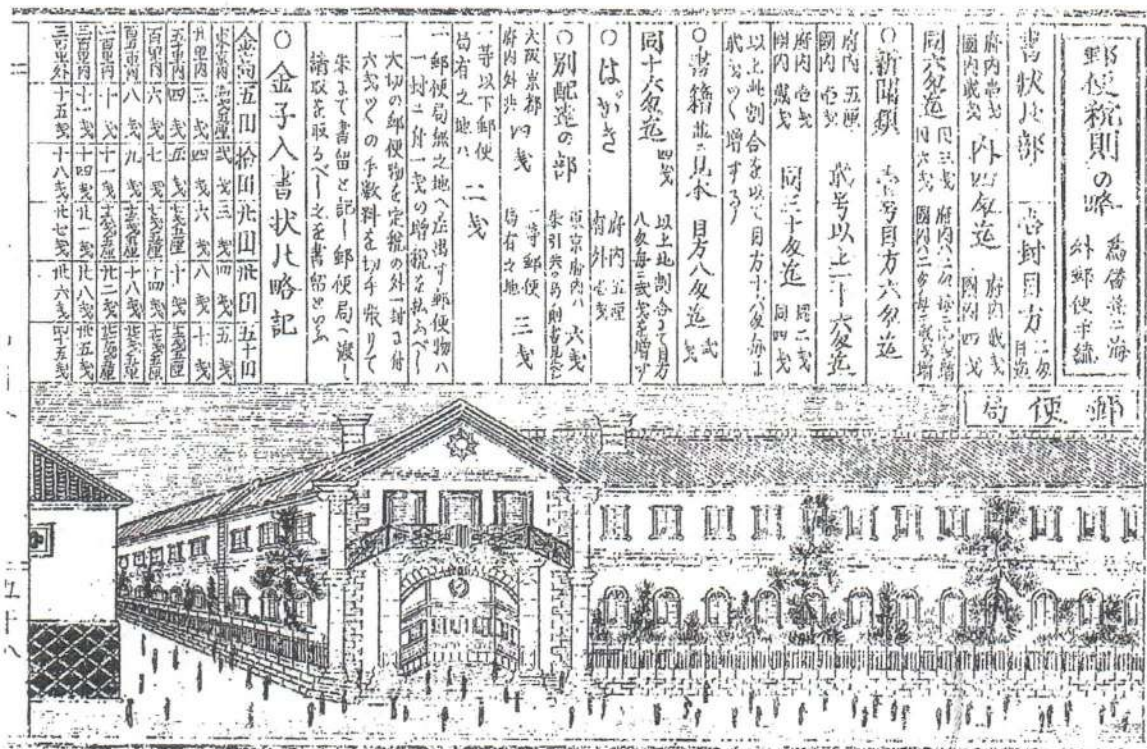


図8 『京都名勝一覽図会』に掲載されている郵便税則の略

出典) 橋本澄月『京都名勝一覽図会』風月堂、明治13(1880)年刊、58頁、京都府立総合資料館所蔵

様相とその編纂時期についてみていくと、いくつかの叙述内容から、明治12(1879)年の半ばあたりまでの様相を中心にとりあげていることがわかる。したがって本書は、『都名所図会』を種本として編纂されるなど近世以来の伝統的な側面を有している一方で、明治以降の事象に由来する場所については、当時代に合うようにその新しい情報を撰さし、場所の物語や景物を新しい京名所の一つとして追加、もしくは修正していったものといえよう。

IV. おわりに

本稿は、地理学的視点からの近代における名所研究の一環として、これまでには扱われることがなかった明治前期の京都で刊行された名所案内記を研究対象として以下について明らかにしてきた。

まず、明治期の名所案内記の叙述内容をめぐっての、高木による「明治10年代の名所記が近世における名所記との内容的な連続性が強く」という指摘について、個別具体的な名所案内記の検証から得られる知見に基づいて再検討を行うことを目的とし、Ⅱ章においてその前提となる明治期の京都で刊行された地理的知識を取り扱う書籍に関する刊行動向を整理した。これによって、明治期の京都では11冊の名所案内記をはじめとして、計203冊の地理的知識に関する書籍の刊行を確認した。その刊行動向とその特徴は、鉄道の敷設が計画された時期であり、その開通時に合わせて多くの書籍が刊行されているほか、博覧会や記念祭といった大規模なイベントが企画・開催された時期にこの種の書籍は豊富に刊行されていた。この時期に刊行された名所案内記の特徴は、幕末以来の一種の慣習とも

いえる所作に基づいて編纂された小型のものが多くことが指摘できた。そして、明治期には地誌が継続的に刊行されているという、近世には見られない特徴も明らかとなった。

第2の目的は、明治前期の京都で刊行された名所案内記について編纂者の名所へのまなざしに注目しつつ、明治前期における「京名所」をめぐる場所認識とその実践の様相について考察することであった。これについてⅢ章では、具体的事例として『開化絵入京都見物独案内』、『花洛名所独案内記』、『京都名勝一覧図会』という3冊の名所案内記を取りあげ、それぞれに名所(名勝)として取りあげられる場所とその叙述内容の特徴について整理した。この3つの名所案内記は、その内容から明治12(1879)年後半あたりまでの景物を京名所として取りあげていたことがわかり、これらを比較検討することで、以下のような共通する特徴を見いだすことができた。

明治前期の京都における名所案内記による京名所の立項とその叙述内容の関係は、(1)近世以来の伝統的な事象や景物に基づいて名所として取りあげられている場所、(2)近世以来の名所であったが、近代以降の事象や景物に基づいて名所として取りあげられていた場所、(3)前近代の事象や景物に基づいて近代に創出された場所、(4)近代化のシンボルとして新たに創出された場所という、4つにパターン化できるだろう。

そして、ここに取りあげられている京名所については、その大半が寺社に関するものであったが、これは明治前期においても宗教都市の側面が強かったためであろう。しかし一方で、近世の名所案内記では必ずといって良いほど取りあげられていた、祭礼・風俗に関するもの、商業や伝統産業についての立項と、その叙述はほとんどみられなかった。この背景としては、明治期に繁昌記など他の案内記類との分節化が進んだ結果、名所案内記の叙述から姿を消したとも考えられよう。近

代以降に創出された場所では、近代的な工場や西洋造りの学校などの建築物や鉄道に関する場所では、「美観」や「壮麗」といった表現が与えられていることがわかる。

最後に、明治10年代に刊行された名所案内記における、「名所」や「名勝」としての場所の表象化について言及するとすれば以下のようになれるだろう。まず「名所」とは、名所観といった編者の場所認識によって見いだされる他所との差異化であり、これらは場所イメージの生産(再生産)の実践といえるのではないだろうか。これを前提とすれば、第1に、由緒や場所の物語が特に秀でている場所では、それらに基づいて「名所」として他所との差別化が行われているのだろう。第2に、明治以降の場所では、その概要(機能)や挿絵を示し、前近代との時間的な差異を強調することで「名所」としての区別化を行っているのであろう。第3に、祭礼が行われる場所では、その形態や様子を視覚的に示すことで、ハレ(非日常)の場所であるという空間的な差異を強調することで、「名所」としての差別化をはかったものと思われる。第4に、煉瓦や鉄骨を用いた西洋風の建造物の外観は、それ自体が他所との差異を示すのに十分であり、これによって「名所」とされたのではなかろうか。

ただし、本稿で検証してきたような、明治前期の京都における名所案内記編纂者の「名所」をめぐる場所認識と表象化や、「場所イメージ」の生産(再生産)という行為は、必ずしも編者独自のまなざしに依拠するものではなく、編纂の過程において、例えば『都名所図会』などといった近世の名著を種本としながら、その時代に適合するように編纂していくという伝統的慣習にしたがった実践であるという側面も少なからずあった。つまり、この伝統的な慣習と編纂姿勢が、先述したように「明治10年代の名所記が近世における名所記との内容的な連続性が強く、一つ一つが

個性的な叙述であったのとは違」うという高木の指摘つながっているのであろう。

しかし本稿では、明治10年代に刊行された名所案内記のうち、3つの案内記にしか言及できていない。本稿で扱ってきた問題の解明には、より多くの資料を議論の遡上にあげるとともに、書誌的なデータベース構築が必要となろう。また、本文中でも、幾つかの今後の課題を示しており、本稿は必ずしも十分な成果とはいえない。これらについては、今後の課題としたい。

〔付記〕

本稿は、平成23・24年度文部科学省科学研究費 特別研究員奨励費23・4324「近世・近代の京都および周辺都市における名所観の成立と変容」(代表者 長谷川奨悟)の研究成果の一部である。

本稿骨子は、2011年11月に開催された人文地理学会大会(於:立教大学)において発表した。本稿をまとめるにあたり、神戸大学人文学研究科所属の長谷川孝治先生、大城直樹先生にご指導いただいた。記して感謝申し上げます。

(神戸大学・人文学研究科・院生・
日本学術振興会特別研究員(DC))

〔注〕

- 1) 野間光辰「開化絵入京都見物独案内」(新選京都叢書刊行会編『新選京都叢書 第8巻』臨川書店、1987)、2-3頁。
- 2) 本研究で用いる名所案内記とは、例えば近世において刊行された『京童』や『都名所図会』に代表されるような、名所や名勝とされる場所や景物を主体として扱ってきたものに限定し、商工案内などについてはこれとは区別して用いることとする。
- 3) 本研究で用いる案内記類とは、名所や名勝に関する名所案内記の他に、買い物に便の良い商工案内記や買物案内の類いのもの、そして、近世では「町鏡」と称された町名案内などといった、場所や事物を案内することを目的とした書籍を総合する語として用いることとする。
- 4) 山本光正「旅行案内記の成立と発展」国立歴史民俗博物館研究報告155、2010、109-135頁。
- 5) 岩佐淳一「旅行とメディア—戦前期ガイドブックのまなざし—」学習院女子大学紀要3、2001、11-27頁。
- 6) 羽生冬佳「明治以降戦前までの名所の成立・変遷に関する研究」ランドスケープ研究68-5、2005、843-848頁。
- 7) 馬場知子「名所本にみる近代東京の都市風景の変容について」ランドスケープ研究67-5、2004、623-628頁。
- 8) 西田正憲「明治後期にける瀬戸内の近代的風景の発見と定着」ランドスケープ研究58-2、1994、211-217頁。
- 9) 加藤政洋「都市の近代化と『近郊の名所』の創出—鹿児島市の櫛木馬場を事例として—」流通科学大学論集16-3、2004、89-105頁。
- 10) 島津俊之「明治・大正期における『熊野百景』と風景の生産—新宮・久保写真館の実践—」人文地理59-1、2007、7-27頁。
- 11) ①三木理史「奈良県刊行の『府県写真帖』に関する考察」総合研究所所報16、2008、59-71頁、②三木理史「『奈良写真帖』に関する考察」総合研究所所報18、2010、101-110頁。
- 12) 網島聖「明治後期地方都市における商業名鑑的『繁昌記』の出版—山内實太郎編『松本繁昌記』を事例に一」史林93-6、2010、119-144頁。
- 13) 『新選京都叢書』全12巻には、江戸期から昭和初期に刊行された、全53冊の地誌類と、計10図の絵地図類が収録されている。野間光辰は、個々の資料の「解題」の中で、資料の体裁や収録する際に採用した出典、内容の概略といった基本的情報の整理を行っている。新選京都叢書刊行会編『新選京都叢書』臨川書店、1985-1989。
- 14) 工藤泰子「近代名所案内記にみる京都の観光空間」京都光華女子大学研究紀要47、2009、15-48頁。
- 15) 高木博志「近代京都と桜の名所」(丸山宏・

- 伊從勉・高木博志編『近代京都研究』思文閣出版, 2008), 141-173頁。
- 16) 笠原一人「背景としての東山」(加藤哲弘・中川理・並木誠士編『東山／京都風景論』昭和堂, 2006), 59-79頁。
 - 17) 前掲15) 159頁。
 - 18) 拙稿「近世上方における名所と風景—『都名所図会』・『摂津名所図会』を事例として—」人文地理64-1, 2012, 19-40頁。
 - 19) 例えば, ①高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店, 2006, ②伊藤之雄『京都の近代と天皇』千倉書房, 2010, などがあげられる。
 - 20) 例えば, ①小林文宏『明治維新と京都』臨川書店, 2004 (初版1998), ②布引敏雄『榎村正直』文理社, 2011, があげられる。
 - 21) 前掲20) ①1-6頁。
 - 22) 村山弘太郎「近世京都の利益信仰—『名所地誌本』による社会的位置付け—」史泉98, 2003, 19-35頁。
 - 23) 前掲18)。
 - 24) 京都市編『京都の歴史 第8巻 古都の近代』学芸書林, 1975。
 - 25) 前掲20) ①1-6頁。
 - 26) 白井哲也『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版, 2004, 3-17頁。
 - 27) 島津俊之「明治政府の地誌編纂事業と国民国家形成」地理学評論75-2, 2002, 88-113頁。
 - 28) 石田龍次郎『日本における近代地理学の成立』大明堂, 1984。
 - 29) 高木博志「史蹟・名勝の成立」日本史研究351, 1991, 63-88頁。
 - 30) 中西僚太郎「明治・大正期の畿島を描いた鳥瞰図」歴史人類38, 2010, 57-58頁。
 - 31) 関戸明子「鳥瞰図にみる近代—草津温泉を事例として—」歴史地理学54-1, 2012, 39-53頁。
 - 32) 中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験』ナカニシヤ出版, 2008。
 - 33) 前掲1) 2-3頁。
 - 34) 前掲15) 159頁。
 - 35) 京都出版史編集委員会編『京都出版史』京都出版史刊行会, 1991。
 - 36) 京都府立総合資料館『京都府資料目録』京都府立総合資料館, 1984。
 - 37) 前掲35) 422-423頁。
 - 38) 案内記類の定義は, 前掲3) による。
 - 39) 名所案内記, 買物案内, 町名案内といったものを分類した。
 - 40) 地誌の他に, 節用地誌, 地誌的記述が多く含まれる絵図・地図もこれに分類した。
 - 41) その他には, 案内記, 地誌, 写真帖以外の地理に関する書籍のうち, 地理教育のための教科書や, 絵画集もこれに含めた。
 - 42) 京都市編『京都の歴史 第10巻 年表・辞典』学芸書林, 1976, 447-448頁。
 - 43) 前掲24) 283-28頁。
 - 44) 拙稿「『雍州府志』にみる黒川道祐の古跡観」歴史地理学51-3, 2009, 25-43頁。
 - 45) 『京都府管内地理問答』は, 地理に関する一問一答形式の問題集である。表1では, その他に分類している。
 - 46) 京都府立総合資料館編『京都府立資料館所蔵改訂増補文書解題』京都府立総合資料館, 1993, 84-85頁。
 - 47) 前掲28) 9-13頁。
 - 48) この経緯と官民の地誌の関係については今後の課題の一つとしたい。
 - 49) 前掲35) 27-199頁。『京都出版史』の刊行目録では, 天地×左右の寸法 (cm), もしくは, 「菊」(菊判カ) と記載・冊数・「和」(和本) とった製本の種類が示されている。
 - 50) 和本の版型の分類は, 内田啓一『江戸の出版事情』青幻社, 2007, 90頁によっている。
 - 51) 川勝徳次郎『花洛名所案内記』, 明治24年(1891)刊(初版明治13(1880)年), 京都府立総合資料館蔵。
 - 52) 山近博義「『京都もの』小型案内記にみられる実用性」(足利健亮先生追悼論文集編纂委員会編『地図と歴史空間—足利健亮先生追悼論文集—』大明堂, 2000), 361-371頁。
 - 53) 前掲1) 2-3頁。
 - 54) 本稿は, 場所に関する案内記の検証を主題としているため, 商工案内である『都の魁』に関しては今後の課題としたい。また, 本書についての研究は, 野間光辰「都の魁」新選京都叢書刊行会編『新選京都叢書 第6

- 巻』臨川書店、1985、1-2頁がある。
- 55) 「商業」には、近世以来の町鏡や商工案内記などに取りあげられてきた、著名な商家や飲食店に関する場所をこれに含めた。
- 56) 「産業」には、西陣など近世以来の伝統的な産業の他、明治期以降の工場など、京都の製造業に関する場所をこれに含めた。
- 57) 「交通」には、近世以来の名所案内記に取りあげられてきた三条大橋や五条大橋といった名橋の他、停車場や鉄橋といった鉄道に関連して敷設された場所もこれに含めた。
- 58) 文字富之助編『開化絵入京都見物独案内』片岡賢三、明治18年(1885)刊、京都府総合資料館蔵。
- 59) 前掲58) 33頁。
- 60) 前掲58) 33頁。
- 61) 前掲52) 361-371頁。
- 62) 前掲18) 26頁。
- 63) 本節において、以下に示す項目の後の()は、表3に示した番号に対応している。
- 64) 前掲58) 4頁。
- 65) 東谷智「転換する社会」(藤井譲治・伊藤之雄『日本の歴史 近世・近代編』ミネルヴァ書房、2010)、97-116頁。
- 66) 拙稿『『都名所図会』にみる18世紀京都の名所空間とその表象』人文地理62-4、2010、74頁。
- 67) 『京都名所撮影』発行年不明、国際日本文化研究センター所蔵(京都名所撮影データベース) <http://www.nichibun.ac.jp/meisyozue/satsuei/c-pg8.html> (最終閲覧日2012年8月19日)
- 68) 前掲67)。国際日本文化研究センターの京都名所撮影データベースにおける本資料の解説には、『京都名所撮影』は明治初期に京都の桑田清新堂から発売された写真集で、表題として日本語の「京都名所撮影」と共に、英語で「JAPAN KIYOTOMEISHO PHOTOGRAPHER」と記されていることから、外国人用の土産物として発売されたものと思われる。なお、本書は明治13(1880)年に京都の住人が入手したものである。(下線部は筆者の加筆)とあることから、明治前期にはすでに刊行されていたと考えられる。
- 69) 前掲58) 29-30頁。
- 70) 前掲42) 436-437頁。
- 71) 編纂時期と刊行年に数年のひらきがあるが、この背景については今後の課題としたい。しかし、このような事例は、例えば『摂津名所図会』では書誌と版權の関係で刊行が遅れ、巻の順番が前後したように近世においても生じていた問題でもある。これについて筆者は、前掲18)でこの問題にふれている。
- 72) 前掲51)。
- 73) 前掲51) 47頁。
- 74) 前掲51) 45-47頁。
- 75) 本書に立項された場所について、起点となっている三条大橋を、便宜上[1]として項目立てがなされている場所を数えていくと計118ヶ所となり、目録とのずれが生じるが、これについては本稿で取りあげる京都府立総合資料館所蔵本が再版本であり、再版時に改編が行われた可能性も考えられる。しかし、たとえ初版であっても、近世の『都名所図会』などといった先行する名所案内記においてもみられるものであり、このずれに関しては既存の名所研究でも取りあげられてこなかった事象の一つであったといえよう。
- 76) 本節において、以下に示す項目の後の()は、表5に示した番号に対応している。
- 77) 橋本澄月『京都名勝一覧図会』風月堂、明治13年(1880)刊、京都府立総合資料館蔵。
- 78) 前掲77) 63頁。
- 79) 前掲77) 1頁。
- 80) 前掲66)。
- 81) 本節において、以下に示す項目の後の()は、表7に示した番号に対応している。